

平成 26 年度 宇都宮大学 卒業論文

携帯電話及び LINE の普及が若者の人間関係に与えた影響

教育学部 学校教育教員養成課程 教科教育コース 社会科教育専攻 4 年

社会学研究室

111106A

小松修平

目次	1
はじめに	2
第1章 若者の人間関係は希薄化しているのか	2
第1節 人間関係の希薄化とは	
第2節 「やさしさ」の変容と携帯電話の関係	
第2章 人間関係希薄化論の否定	6
第1節 調査データに見る今日の若者の人間関係	
第2節 なぜ若者の人間関係は希薄化しているように見えるのか	
第3章 若者の携帯電話利用と人間関係	12
第1節 今日における若者の携帯利用の特徴	
第2節 携帯利用と人間関係との関連	
第3節 携帯利用以外の要因と人間関係の関連	
第4節 分析結果のまとめと補論	
第5節 携帯電話がつくる人間関係の問題点	
第4章 人間関係に対する LINE の影響（インタビューからの考察）	28
第1節 LINE とは	
第2節 なぜ若者は LINE を使うのか	
第3節 大学生に対するインタビューの分析	
第4節 インタビュー分析のまとめ	
第5節 LINE の利用が人間関係に与えた影響	
第6節 「やさしさ」と LINE 利用の関係	
終わりに	60
参考文献	62

はじめに

私が携帯電話を持ち始めたのは高校に入学するときである。それも、今多くの若者が手にしているスマートフォンではなく、二つ折りの、いわゆる「ガラケー」と呼ばれるものである。扱う機能も通話とメールに限られ、今のようにオンラインゲームや SNS を扱う人は自分を含めてあまり多くはなかった。しかし、現在ではスマートフォンや iPhone の著しい普及に伴い、小・中学生がスマートフォンを手にしている光景を目にすることがある。そして SNS などの様々な機能やアプリを使いこなし、ネット上で友達とやりとりをしている。

ここで私がかねてから疑問に感じていたのは、このように携帯電話が普及し、携帯を持ち出す年齢が低下していることによって若者の人間関係が希薄化してきているのではないかということである。携帯でいつでもどこにいても友達とコミュニケーションを取れるようになったことで、友達と外で遊ぶ機会が減少したり、言いたいことを直接言わずにメールで伝えてしまうといった、社交性の育成を妨げてしまう要因が出てきてしまうのではないかと危惧していた。とりわけ私が注目しているのは LINE というアプリである。この LINE の登場でメールや通話以上に友達とやりとりをすることが容易になったため、人間関係の希薄化が加速したのではないかと考えていた。

しかし様々な先行研究を読んでいると、実は携帯電話の普及によって若者の人間関係は希薄化ではなく濃密化しているということが多くのデータによって裏付けられている。いつでもどこにいても友達と連絡を取ることができるため、単純に友達とつながっている時間が長くなり、関係がより深くなった多くの研究者は述べている。ではなぜそれまでは人間関係が希薄化してきていると言われていたのだろうか。このことに関心を抱き本研究を始めることにした。またこの研究では、ここ数年でユーザーが爆発的に増えている LINE が若者の人間関係にどのような影響を与えているのか、大学生に対するインタビューをもとに考察していく。

第 1 章 若者の人間関係は希薄化しているのか

この章ではまず、そもそも人間関係が希薄化しているとは、若者がどのような友達とのつきあい方をしている状態を指すのかを見ていく。さらに人間関係の希薄化はどのような原因で起こるのかを、携帯電話との関係を中心に検討していく。

第1節 人間関係の希薄化とは

希薄化した人間関係とは主に「広く」で「浅く」、「表層的な」つきあい方をしている状態と捉える。単に友達の数が少ないというわけではない。むしろ交友関係が広いがゆえに一人一人との関係が弱くなったり、うわべだけのものになってしまうことがある。

人間関係の「広さ」に関しては、若者の友人・親友の数は一貫して増加する傾向にある。NHKが中高生を対象におこなっている「青少年の生活と意識に関する基本調査」(NHK放送文化研究所2013)によれば、1982年から1987年、1992年へと一貫して「親友の数」は増加している。また佐山(1985)や千石(1991)が行った中学生と高校生に対する調査の結果、「お互いに心を打ち明け合う」「ウケるようなことをする」といった人と関係を結ぶことを好む内容の項目への肯定率が高かった。しかし一方で、「相手に甘えすぎない」「お互いの領分にふみこまない」といった、深い関係を好まない内容を示す項目への反応も多かった。この結果から円滑で楽しい関係を求めつつ、お互いの関係が深まることを拒絶する傾向が見られたと指摘している。このように、親しく一緒にいる友人の数は増えているのだが、改まって議論をしたり、悩みごとを相談したりはせず、互いのプライベートには深入りしないようにしている。相手を傷つけないように、そして自分自身も傷つかないように行動や発言に気をつかい、うわべだけの関係を築いてしまうのである。これが交友関係は「広い」が一人一人との関係は「浅く」で「表層的な」希薄化した人間関係である。

第2節 「やさしさ」の変容と携帯電話の関係

そもそも、若者の人間関係が希薄化してきたとする論が見られるようになってきたのは、1980年代半ばごろからである。千石(1985)や栗原(1996)は、自分自身や他者を傷つけることを恐れ、相手との関わりを表面的なままにとどめる傾向を指摘している。とくに栗原は、1960年代末から1970年代にかけての若者文化のキーワードであった「やさしさ」の意味が、しだいに「自他を傷つけない」というだけの自己中心的な意味に変容したと述べている。それにともなって対人関係が希薄化し、友人も自分の内面に立ち入らせない、相手を傷つけない表面的なやさしさへと変容していったとしている。そして、親密な友人関係をもつ若者と、「自他を傷つけない、群れていることの安心感から成り立つ」という自己中心的な友人関係をとる若者に二極分化が進んでいるとしている。

そうした「やさしさ」は、さらに1990年代以降には、相手の気持ちを確かめない一方的な「やさしさ」へと変質していく。大平(1995)はこのことに関して、近年「や

さしさ」の意味に「ねじれ」が起きてきたと主張する。旧来の「やさしさ」とは、相手の気持ちを察し共感することで、お互いの関係を滑らかなものにするのであったのに対し、近年の若者にとっての「やさしさ」とは、「不用意に『親切そうなこと』をして」相手の気持ちに立ち入らないことである。大平は、老人に席を譲る行為は、相手が老人扱いされたと思い、かえって傷つけてしまうだろうと考え、むしろ席を譲らない方がやさしいとみなす若者を例に挙げている。つまり、相手の気持ちを考えることも含めて、より自己中心的な行為を「やさしさ」と捉える若者が増えたことを指摘している。そして、ポケベルは「双方がコミュニケーションの第一歩を相手にゆだねてしまうことができる、いわば『受け身になるための道具』」であるとした。そのうえで、かかってきたら応答せざるを得ない電話との対比で、ポケベルは新しい「やさしさ」に適合的な道具であると位置づけている。なぜなら、電話は直接相手を電話口に呼び出すために相手「わずらわせる」が、ポケベルはメッセージを送っておけば相手に自分の都合に合わせて読んでもらえるからだ。

この大平氏の論をもとに考えると、携帯電話もこの新たな「やさしさ」に適合したと言えるだろう。若者が使用するコミュニケーション・メディアは、ポケベル、PHS、携帯電話と移行していった。さらに、携帯電話が普及するにつれて、年齢が低い世代ほど携帯機能のうち、通話よりもメールを多く利用するということが、モバイル・コミュニケーション研究所が行った調査で明らかになっている。メールはポケベルと同様、文字によるコミュニケーションツールであるので、お互いがやりとりの第一歩を相手にゆだねることができる。例えば、今すぐ伝えなければならぬ用件があった時に、「今は仕事中だから電話するのは迷惑『だろう』」と思い、メールでメッセージを入れておくだけにあることがある。この場合、相手にとっては電話してきてでも今すぐ知りたかった用件だった可能性もあるのだが、そのような相手の気持ちはひとまず考えずに、自分の考える「やさしさ」を優先させている。相手の気持ちに立ち入らず、自己中心的な「やさしさ」を優先させるようになったという意味では、携帯電話は若者の表面的な人間関係形成を加速させたと言えるだろう。

このように、互いの対立の顕在化を極端に恐れ、いかなる場合でも、相手を傷つけないように細かい配慮を行う関係を、土井（2008）は「優しい関係」と呼んでいる。「優しい関係」の背景には、身近な人間から承認を得続けられないと安定できないような、自己肯定感の脆弱性があると土井は指摘する。相手の反応を少しでも読み違えれば関係自体が破綻の危機にさらされるのが「優しい関係」の特徴であり、そうした破綻は自己の存在基盤を揺るがしかねないことでもある。よって若者は、「優しい関係」を維持することに最大限のエネルギーを投入し、その場の空気をきちんと読んでノリに合わせ、仲間をシラけさせないように気を遣うことになる。このように身近な人間関係にエネルギーを使い切ってしまう若者は、仲間以外の外部に対して気を回す余裕をなくしてしまうとも、土井は述べている。

若者にとっての「やさしさ」の意味が変わってきたことで、「相手に気を遣う」「周りの空気に合わせる」「ノリに合わせる」といったことが、友人関係を築いていくためのカギとなっている。携帯メールでは、このような相手を傷つけないように、自分が傷つかないように細心の注意をはらいながらコミュニケーションをとりやすい。なぜなら、携帯を介してのやりとりでは直接相手と顔を合わせることがなく、感情を相手に読み取ることがないからである。対面して話す場合には、空気を読んで心にもないことを言う時があるが、表情や仕草からそれが本音ではないことが相手に知られてしまう可能性がある。つまり、携帯メールでのやりとりでは、お互いが自分をさらけ出さずに表面的な関係を築きやすいのである。

しかし、携帯でそのようなやりとりを続けていると、いざ相手と直接話すときに、どのように接したらよいかわからなくなってしまうのではないか。正高（2003）はこのことに関して、若者はITメディアの「どこからでも」「いつでも」という利便性に魅惑されるあまり、ITメディアの支配から自由になった状況でのつきあいを忘れてしまったと述べている。携帯メールを使って交信する若者は、対面場面では伝えにくいことでも、メールなら可能であると言い、顔を合わせて会話する方がかえってつらいとこぼす。個々人は公的世界へと出て、他者と交渉を通じてはじめて自己実現を遂げるとしている。そうである以上、空間上の近接性と時間上の持続性を欠いたコミュニケーションというものには、おのずと限界が生じてくる。その問題がもっとも顕著に表れてくるのが、「相手とどのようにして信頼関係を結んだらいいのか」という「疑念」なのだとしている。どこにいるのか確かでない相手との瞬間瞬間のやりとりの中で、いかにして信じ合えばいいのかを見きわめる術を見いだせないでいると正高は述べている。

以上、本節では、若者の人間関係の希薄化と携帯電話の利用の関係性について、様々な研究者の論を見てきた。これらの考えからは、若者の考える「やさしさ」の意味の変容が、人間関係の希薄化における重要な要因であることがうかがえる。そもそも人間関係の希薄化が議論されるようになった1980年代以前は、人間関係において「やさしさ」の意味があまり重要とされていなかった。「こんなことを言ったら相手を傷つけるのではないか」と考える前に、思ったらすぐに言葉にして相手に伝え、直接的にぶつかり合うことのほうが、人間関係を築くうえで重要とされていた。大平氏の例でいうと、目の前に電車の中で立っている老人にとっての「やさしさ」とは何かを考える前に、すぐに席を譲ることが一般的であった。

しかし、若者にとって「やさしさ」の意味が人間関係において重要とされるようになっていくうちに、思ったことをすぐに行動に移すことができなくなっていく。行動する前に「今から自分がしようとしていることは、本当に相手のためになるのだろうか」と、一度考えてしまうのである。そして、そのような考えが相手の気持ちを確かめず自己中心的なものになっていき、結果的に思ったことを行動に移すことが少なくなっていくのである。このように、社会の変化によって若者の考える「やさしさ」の意味が、お互

いの気持ちを共感して良好な関係を築こうとするものからから、相手の気持ちを考える行為も含めて自己中心的な意味合いに変わり、表面的な関係を築くようなものになっていった。このような「やさしさ」の意味の変質とともに、自他を傷つけないように相手に気を遣うような人間関係を形成するようになった。そのような関係の形成を携帯電話（特にメール機能）は加速したと考えられる。メールは通話に比べて、応答に対して強制的な側面を持たず、応答する前に考える余裕があるからである。表層的な人間関係を加速させたという意味では、携帯電話は人間関係の希薄化を促したと言えるだろう。

第2章 人間関係希薄化論の否定

第1章では、希薄化した人間関係とはどのような関係と捉えられているのか、そしてそのような関係に携帯電話はどのような影響を与えているのかを見てきた。若者にとっての「やさしさ」が変化したことが大きな要因で、人間関係が希薄化していると考えられていることがわかった。しかしながら、様々な研究者が行ってきた質問紙調査の結果の多くは人間関係の希薄化を支持するものにはなっておらず、「広い」が必ずしも浅くはない友人関係を裏付けている。本章ではその裏付けとなるデータをいくつか紹介したうえで、なぜ若者の人間関係は「浅く」希薄化していると言われるのか、そしてその原因が「やさしさ」の変容とどのように関連しているのかを検討していく。

第1節 調査データに見る今日の若者の人間関係

第1章で述べたように、希薄化した人間関係とは「広くて浅く、表面的な」関係のことで、友人関係の拡大が前提となっている。「広さ」に関しては、「親友の数」が年々増加している点で、より多くの人とつきあっていて友人関係が広がっていると言えるが、様々な調査データの推移からはそのつきあい方が浅くなっているとは言えず、むしろ友人関係がより重要視されている傾向さえ見いだすことができる。

たとえば、先に紹介したNHKの「青少年の生活と意識に関する基本調査」（NHK放送文化研究所2013）によれば、1982年から1992年にかけて、高校生の「親友」とのつきあい方は「何の隠し立てもなくつきあう」が60%台後半、「心の深いところは出さないうつきあう」が20%台前半を保持しており大きな変化はない。あるいは、総理府の「青少年の連帯感などに関する調査」では、「どんな時に生きがいを感じますか」という質問に対する「友達や仲間といるとき」との回答は、1980年以降「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」を抜いてトップであり、その割合も1970年には38.8%であったのが、1995年には63.2%となっている。

また比較的新しい調査結果からも、現在の若者の決して希薄化しているとは言い難い人間関係を見いだすことができる。これもNHKが1994年から2000年に生まれた世代の子どもを対象に行った「中学生・高校生の生活と意識調査2012」によると、悩みごとや心配事の相談相手を1人だけ選んでもらったところ、中高ともに「友だち」と答える割合がトップに位置している。高校生に関しては2位の「お母さん」を30%以上はなしている。時系列でみると、1992年以降「友だち」に相談する人は減り、「お母さん」に相談する人が増えてきてはいるが、それでも高校生に関しては、2012年の段階で2位の「お母さん」を30%以上はなしている。また「悩みごとを相談できる友だちの数」を聞いたところ、「いない」と答えたのは中学生で5%、高校生で3%にとどまっており、中高ともに「2~3人」という回答が最も多く、半数を超えている。「10人以上」と答える人も合せると、複数の相談相手がいる中高生は8割を超えている。この結果から、悩みごとの相談といっても唯一無二の親友にするといったイメージではなく、気軽に相談を持ちかけられる深い関係が複数築けている中高生の姿が浮かぶ。

図1 悩み事の相談相手

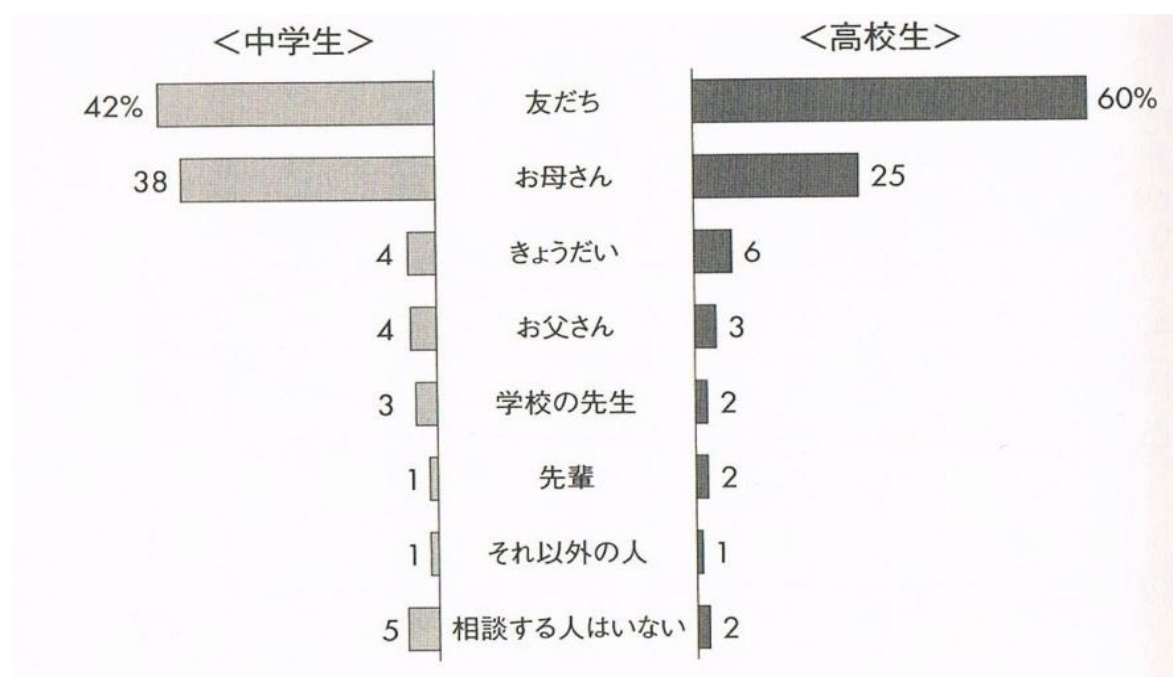


図2 時系列でみた悩み事の相談相手

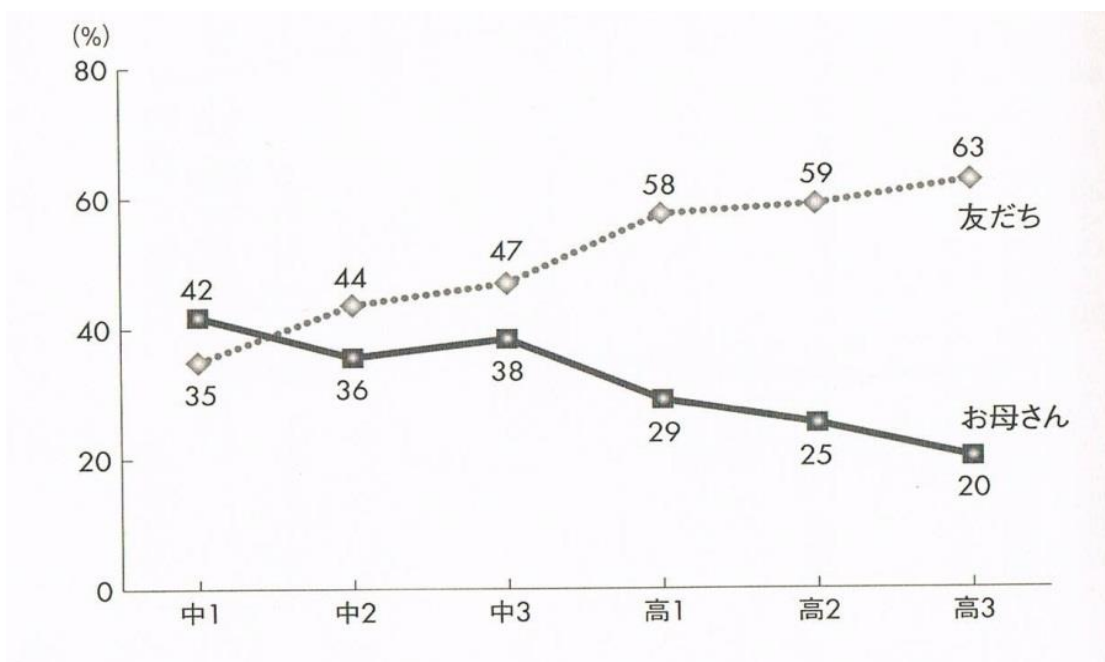
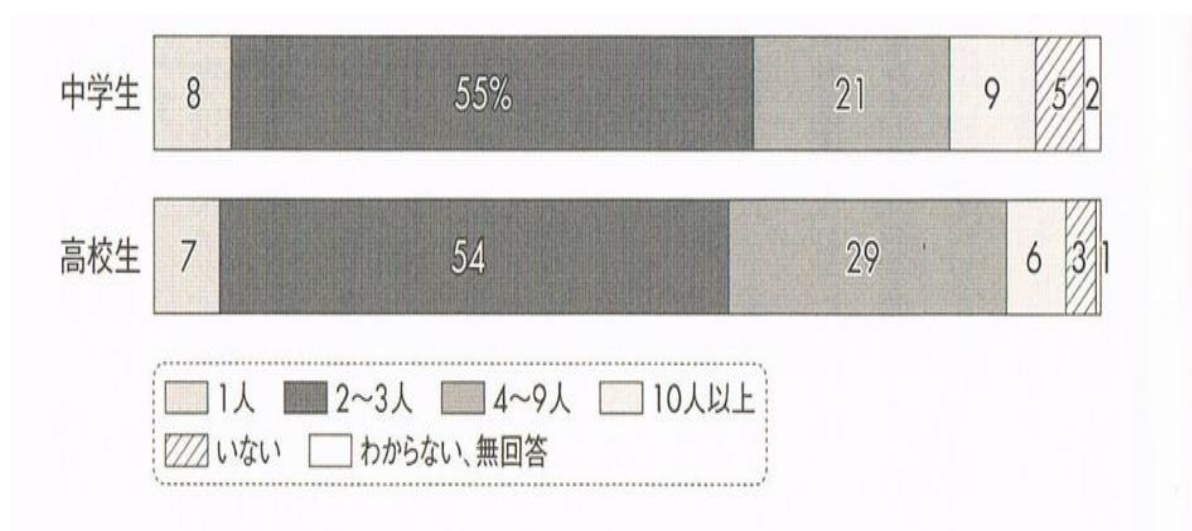


図3 悩み事を相談できる友だち



つまり、今日の若者の人間関係は「広くて浅く」希薄化していると評されるが、少なくともこれらの調査データからは「浅い」人間関係は裏付けられないのである。ではなぜ若者の人間関係が希薄化していると言われるのだろうか。

第2節 なぜ若者の人間関係は希薄化しているように見えるのか

橋本良明（1988）は若者の人間関係希薄化論の原因として、コホート効果と年齢層効果の混同、分析データの偏り、マスメディアの影響の3点が考えられると述べている。

コホートとは、一定の時期に人生における重大な出来事（出生、結婚、就職など）を共通に体験した人々の集合のことである。このコホート効果と年齢層効果の混同とは、すでに若者ではなくなった論者が、かつては自分たちも同じような意識や行動様式を示していたことに気づかず、若者の友人関係を評している場合のことを指す。たとえば友人関係に関しては、年齢があがるほど深いつきあいを好む傾向にあり、若者は仲がよい友達とほど、くだらない雑談を延々と続ける傾向にある。若者を評する論者たちも自分たちも若いころはこのような友人とのつきあい方をしていたのにそのことを忘れ、人生相談をしたり、何かを熱く討論したりする仲を深い関係と捉えるようになる。そして深い関係を好む論者は若者の人間関係を常に浅い関係と考えてしまうのである。つまり、論者と若者とでは年齢により友人関係の質の捉え方が違っているため、若者人間関係は希薄化していると捉えられてしまうのであるという。

次に分析データの偏りとは、若者論を論じるのが大学の研究者が多く、主に大学生が調査対象とされていることに原因を求めるものである。大学進学率の変化などによる学生の質の変化や、学生と研究者との関わり方の変化などが、身近に接している大学の研究者ほど「浅く見える」ことにつながっているという。

最後にマスメディアの影響とは、マスメディアの若者論の論調が一貫して「若者の人間関係が希薄化している」というものであることに原因を求めるものである。このことに関しては辻大介（1999）も指摘している。マスコミは子どもや若者が事件を起こすたびにそれを大々的に報道する。「おたく」という言葉を世に知らしめた1989年の連続少女誘拐殺人事件の際には、容疑者の青年がコミック本やビデオテープに埋もれて暮らしていたこと、ほとんど友達がいなかったことが集中的に報じられた。ここから「情報の濃密化」と「人間関係の希薄化」が短絡的に結びつけられ、社会の情報化が進んでいることによって若者全体に関係希薄化が進んでいると捉えられたのだという。つまり犯罪や事件を起こす一部の特異な若者を大々的に報じることで、その特殊な傾向を世の若者全体に当てはめて考えてしまうところに辻は人間関係希薄化論の原因を求めている。

また辻は、人間関係希薄化論の原因は対人関係を取り結ぶ回線の容量（太い/細い）ではなく、回線のスイッチの固さ（オンとオフの容易さ）が変わったことにあるのではないかと述べている。そして回線を常に開いたままの関係を全面的、場面において回線を切り替えられる関係を部分的とし、現在の若者の全面的なつきあいを志向する割合の減少と部分的なつきあいを志向する割合の増加という変化から若者の人間関係にフリッパー志向が強まっているのではないかと考察した。フリッパー志向とは、その時々

気分に応じてテレビのチャンネルを手軽に切り替えるように、場面に合わせて気軽にスイッチを切り替えられるような人間関係の志向を指す。部分的な関係を志向する割合が増加していることに関して辻は、「部分的な関係＝表層的な関係」という図式に疑問を抱いた。その上で、同心円状の自我構造を前提にした場合は、「全面的な親密な関係」か「部分的な表層的な関係」しかありえないが、自我が複数の中心を持つならば、「部分的だが表層的ではない」人間関係も考えられると述べた。

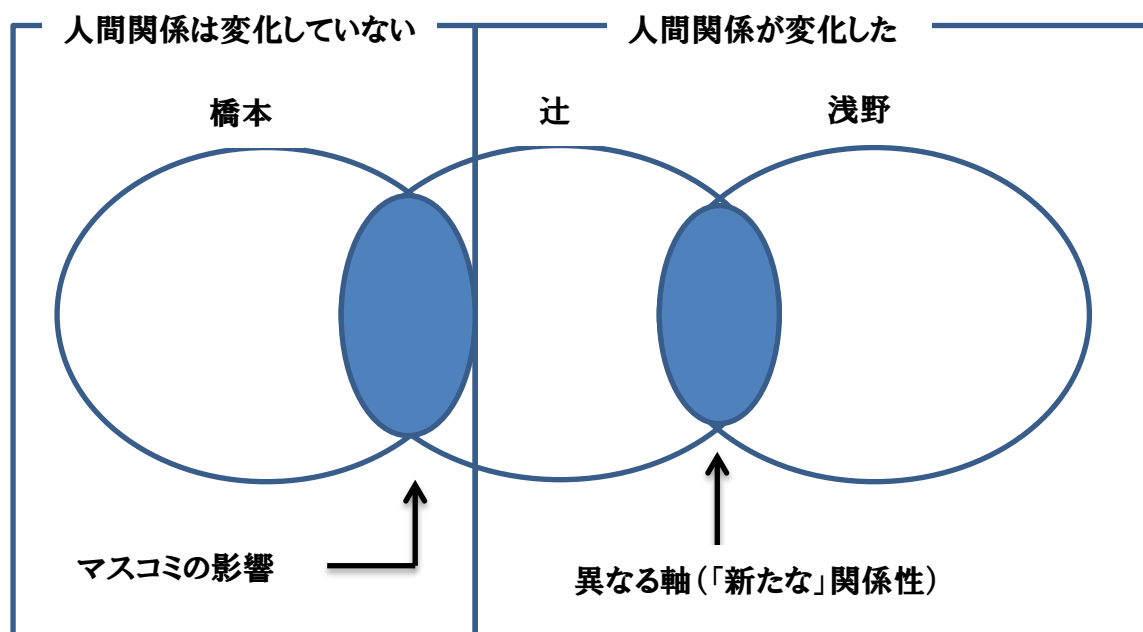
さらに浅野智彦（1999）は辻と同様に、若者の人間関係に「状況志向」が見られることを調査データから明らかにし、それがなぜ「浅く」見えるのかをより詳細に論じている。浅野は1992年に杉並区と神戸市の若者を対象に行われた調査から友人関係のパターンを分析し、3つの因子をみいだした。①多様な友人関係を積極的に求める「遠心志向因子」、②友人関係から撤退していこうとする「求心志向因子」、③相手やつきあいの程度に応じて関係のあり方が変化する「状況志向因子」の3因子である。①の因子が高い人は外向的な人、②の因子が高い人を内向的な人とすれば、③の因子が高い人はつきあいに応じて異なる顔を見せ、友人関係は広いが、その友人関係は重なっていない。だからといって、常に相手と距離をとるのではなく、熱中して相手と話をすることも多いという友人関係をとる人となる。これまで友人との親密さを考える際に前提とされてきたのは、「本当の自分」をどれだけ相手と共有できるかによってつきあいを＜浅い・深い＞という軸の上に位置づけるものであった。この前提をもとに③の因子の高いタイプの人々の人間関係を見ると、「誰に対しても『本当の自分』を見せることのない、実に表面的で浅いものに見えるだろう」と浅野は述べる。そしてこのように、今日の若者の人間関係が浅いものに見えるのは、「深さ」という次元を想定して見るからであり、そこで見落とされているのは、「浅さ」や「深さ」といった人がものを見る時の視点のとり方がもたらす効果だと捉えている。さらにこのような「親密性」の変容の原因を、親密な関係が結ばれる場の変化に求めている。これまでの親密な関係は、家族や夫婦などの包括的な関係の場に限定されており、そのような関係性から離脱することが困難であった。しかしこのような関係は少しずつ解体されていき、かわって参入・離脱の比較的容易な関係において親密性が生まれてきたと述べている。

これら3人の論者の考えは、第1章で述べた「やさしさ」の変容と関連付けて考えることができる。若者にとっての「やさしさ」の意味が変化したことによって、若者の考えが行動に表れることが少なくなった。相手のために何かをしてあげることが「やさしさ」であると考えている研究者からすれば、若者の「やさしい」行動が減ったことで、若者の人間関係は表面的なものになり希薄化したと捉えられるだろう。しかし、辻氏、浅野氏のように、人間関係の質自体が変化したと考えると、また違った側面が見えてくる。相手と関係を築くときに「本当の自分」を見せて接するか隠して接するかを、人間関係の＜浅い・深い＞の次元で考えるのではなく、相手や状況に合わせて接し方を変えるような人間関係に変化したと、辻氏、浅野氏は述べている。「やさしさ」の意味が変

化したことで、相手にとっての「やさしさ」とは何かを考えることが多くなった。すると、接する相手によって自分の行動を変えるようになる。このように、行動する前に一度相手のことを考えるようになったことで、相手に「本当の自分」を見せることよりも、相手にとって一番適している行動を選択することが、人間関係を築くうえで重要視されるようになったのである。つまり、若者の人間関係における「やさしさ」の意味が変化したとしても、その関係が「浅い」ものだと言えとは限らず、人間関係の希薄化に必ずしも結びつかないのである。

ここまで3人の研究者の考えを見てきたが、ここで一度3人の論をまとめてみる。橋本氏の論は、若者の人間関係それ自体は昔も現在も変化しておらず、その人間関係を分析する人間の捉え方が変化したため、希薄化したように見えるという考えである。この橋本氏の論と、辻氏、浅野氏の論は共通して少し異なっている部分がある。それは、近年の若者の友人関係が変化しているとした上で、その新たな関係を<浅い-深い>とは異なる軸で捉えようとしていることだ。その「新しさ」とは、若者が状況に応じて友人関係を選択することであり、このような関係性は一見「部分的で浅く」見えるが、あえて<浅い-深い>を使って表現するならば、「部分的でかつ深い」と捉えるべきであるとする。このような理解は、友人関係の質の変化、およびそれと密接に関連する自我構造の変化の可能性を示唆するものである。次章ではこのような選択的な人間関係についてより詳しく検討していくとともに、この関係性に携帯電話がどのように関わっているのかを見ていく。

図4 3人の研究者の論



第3章 若者の携帯電話利用と人間関係

前章では、若者の人間関係が希薄化しているという論をいくつかのデータをもとに部分的に否定したうえで、なぜ今日の若者の人間関係が「浅く表面的に」見えるのか、その原因を検討してきた。そしてそこから、人間関係希薄化論の原因を友人関係の質の変化に求め、今日の若者は選択的な人間関係を好む傾向があることをみいだした。本章ではこの選択的な人間関係に携帯電話がどのように関わっているのか見ていく。

日本社会に携帯電話が普及し始めたのは1990年代後半である。(松田 2014)そして2000年代に入り、スマートフォンやiPhoneが日本に浸透し始め、携帯電話の普及率がますます上がると同時に多機能化が進んだことで、日常生活において欠かせないメディアとなった。この携帯電話の普及によって若者の携帯電話の利用状況や使用の仕方などが変わってきている。本章ではまず、今日における若者の携帯利用状況の変化や特徴を簡単に見ていく。その上で、その変化や特徴が人間関係にどのような影響を与えているのかを検討していく。

第1節 今日における若者の携帯利用の特徴

日本において携帯電話ははじめ、持ち運びが可能になったことで、いつでもどこでも利用可能な電話、つまり音声メディアとして普及した。そして先行メディアであったポケットベルや競合メディアとなったPHSとの兼ね合いを経て、2000年代に入ると携帯は多機能化、マルチメディア化した。通信以外にもカメラやゲームなどの様々な機能を利用する人が増え、携帯は日常生活のあらゆる場面で活用されるようになった。

ここで若者の携帯利用の特徴のうち以下の二つのものに注目したい。

一つは「番通」と略される発信番号表示の活用である。若者はこの「番通」でかけてきた相手を確認し、応答するかどうかを決める。その時に話したくない相手や知らない人からの着信の場合、電話に出ないという選択をすることができる。電話に出る場合でも、あらかじめ誰からの着信であるかを確認し「心の準備」をすることができる。電話は発信者は好きな時にコミュニケーションを始められるが、受信者側は電話に出るまで相手が誰だかわからない。このような電話の「暴力性」を携帯電話は「番通」によって弱めている。

もう一つの特徴は通話よりもメールを利用するという点である。前述したように、当初携帯電話は音声メディアとして普及した。しかしモバイル・コミュニケーション研究会が行った全国調査で、年齢別に週当たりの携帯での通話とメールの利用頻度を調べたところ、若者の間では通話ではなくメールを多く使う傾向にあり、年齢が高くなるにつ

れてメールを使う比率が低くなっていくことがわかった。(図5)石井(2014)の調査でも若者の間では携帯で通話ではなくメールを多く使う傾向にあるが、40代以降では通話の方がメールより多くなることを示している。(図6)

図5 男女別、年代による携帯メール利用率(2011年)

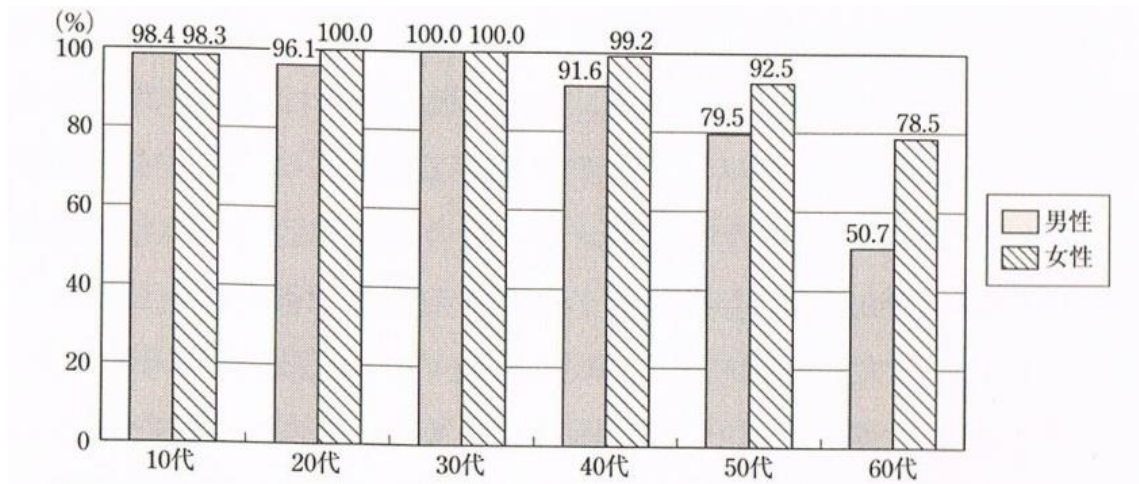
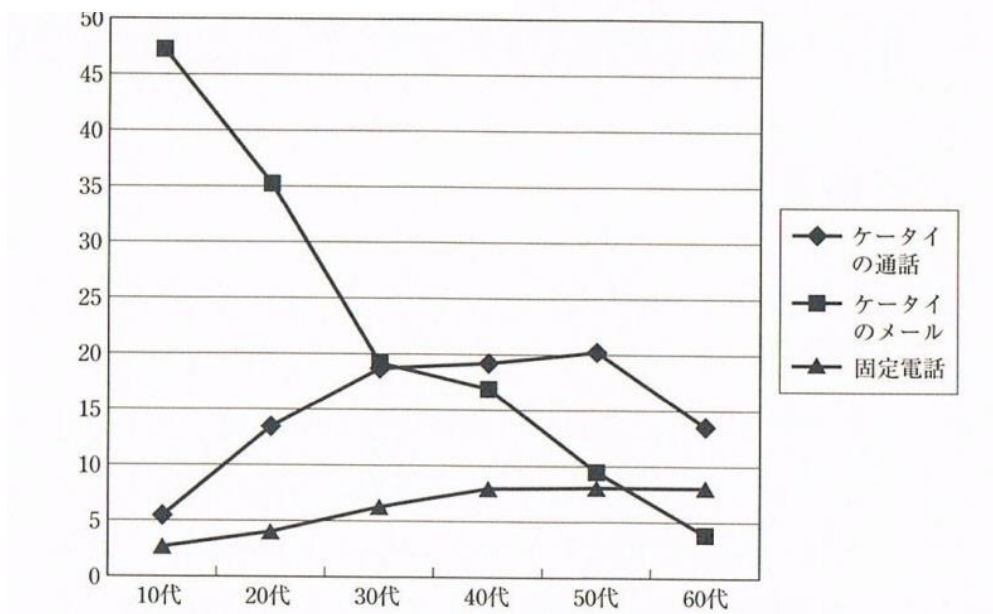


図6 年齢別に見た週当たりの利用頻度



また、同じくモバイル・コミュニケーション研究会が日本全国の男女12~69歳3000人を対象に行った調査でも、2001年から2011年にかけて携帯利用者のうちメールを利用している人の割合が57.7%から88.2%へ大幅に増加していることがわかっており、

全年齢を通して見てもメールの利用率は伸びていることを示している。松田(2000)はこの文字通信の普及に関して、「今日では『ポケベル=文字メディア、携帯電話=音声メディア』という従来の構図はもはやあてはまらない。携帯電話は音声のみが交換される『電話』というよりはむしろ、音声も文字も交換できる、ある種のマルチメディア情報端末となっている。」と述べている。

なぜ若者は通話よりメールを多く利用するのだろうか。移動体メディア研究会が1999年に大学生を対象に行った調査（以下、大学生調査）において、携帯の文字送信機能(メール)を利用した動機を尋ねた。その回答で最も多かったのは「通信費用が安くすむから」であり、「友達が利用していたから」、「相手を電話口に呼び出さなくてもよいから」、「おもしろいから」と続いている。中でも、「相手を電話口に呼び出さなくてもよいから」という理由は、電話越しの相手に気を遣っていることがうかがえる。この理由から見られる、メールの相手の状況を考えずに気軽に連絡できるという特徴は、後に述べる選択的な人間関係に大きく関わってくる。この特徴が1999年の時点で若者の間で注目されていたことは非常に興味深い。とはいっても、男女別にみると女子にメールの利用者が多いことから、ポケベルや交換日記などの従来の文字コミュニケーションの延長線上にあることが推察される。(松田 2000)

これらの理由に加えて岡田朋之ら(2012)は、公共の場で携帯による通話はすべきではないというマナー意識を、理由として挙げている。携帯電話が普及していく中で電車などの公共の場では携帯利用、特に声を出す通話は控えることがマナーとされるようになった。通話は公共空間において互いに相手の振る舞いに関心を示さない「儀礼的無関心」(E.ゴッフマン 1974)や「不関与の規範」(Milgram 1970)を乱すものとして、特に日本において忌避される。その点メールは着信音さえ消してしまえば、声を出さずに、公共空間の規範を乱すことなくコミュニケーションをとることができる。

また、松田氏や岡田氏の考える理由に対して批判的な考えも存在する。松下(2012)は、モバイル・コミュニケーション研究会が2011年に行った調査で出された、通話料金や公共のマナーに対する意識は年齢や性別によって差が見られるという結果に注目した。この調査では、携帯利用における通話の比率(通話数+メール数における通話の占める比率)を目的変数として回帰分析を行った。この分析では、毎月の携帯の利用料金、本人の属性として世帯収入、フルタイムの職業かどうか(ダミー変数)、性別、年齢に加え、「携帯の普及によって、公共のマナーが悪くなった」に同意する程度と「メールの方が通話よりも気兼ねしない」を説明変数に加えた。その結果、公共のマナー意識がメールを使う頻度に影響を与えているという傾向は見られず、利用料金と通話比率は統計的に無関係であり、利用料金が高いからといって通話をやめてメールに代えるという傾向もなかった。むしろ逆に、収入が高く経済的に余裕がある人ほど、また利用料金が少ない人ほど、通話ではなくメールを多く使う傾向が見られるのである。さらに、回帰分析の推定結果では、通話回避の意識(「メールの方が通話よりも相手に気兼ねせ

ずに連絡できる」) が強く影響していること、年齢が低いほど、また男性より女性の方が有意に通話が少ないことが示された。松下はこの結果から、若者のメール比率が高いのは、利用料金やマナー意識などの他の要因で説明できるものではなく、通話を避けたいという意識と年齢・性別といった利用者の属性それ自体によるものであると考察した。松下は「循環論法的になってしまうが、若者の間で友人間の連絡は通話ではなくメールを使うべきと考える人が多いので、若者同士ではメールの利用が多くなり、メールが『事実上の標準』となっているのであろう。」と述べている。

ではここで少し若者の携帯の利用状況（主にメール利用状況）を見ていく。2010年に発表された Benesse 教育研究開発センターによる「第2回子ども生活実態調査」では、小学生中学生高校生の携帯利用について2004年と2009年の調査を比較している。まずは携帯の所持率を見てみる。2009年の各学校段階の携帯所持率は、小学生26.2%（2004年は18.9%）、中学生50.1%（2004年は45.3%）、高校生94.8%（2004年は92.8%）である。小学生では4人に1人、中学生では2人に1人、高校生では10人に9人が携帯を持っていることになる。2004年と比べても、各学校段階において携帯所持率は増えた。以前よりも、早い段階から携帯を所持する傾向が見られる。

図7 携帯所持率（学校段階別・性別比較）

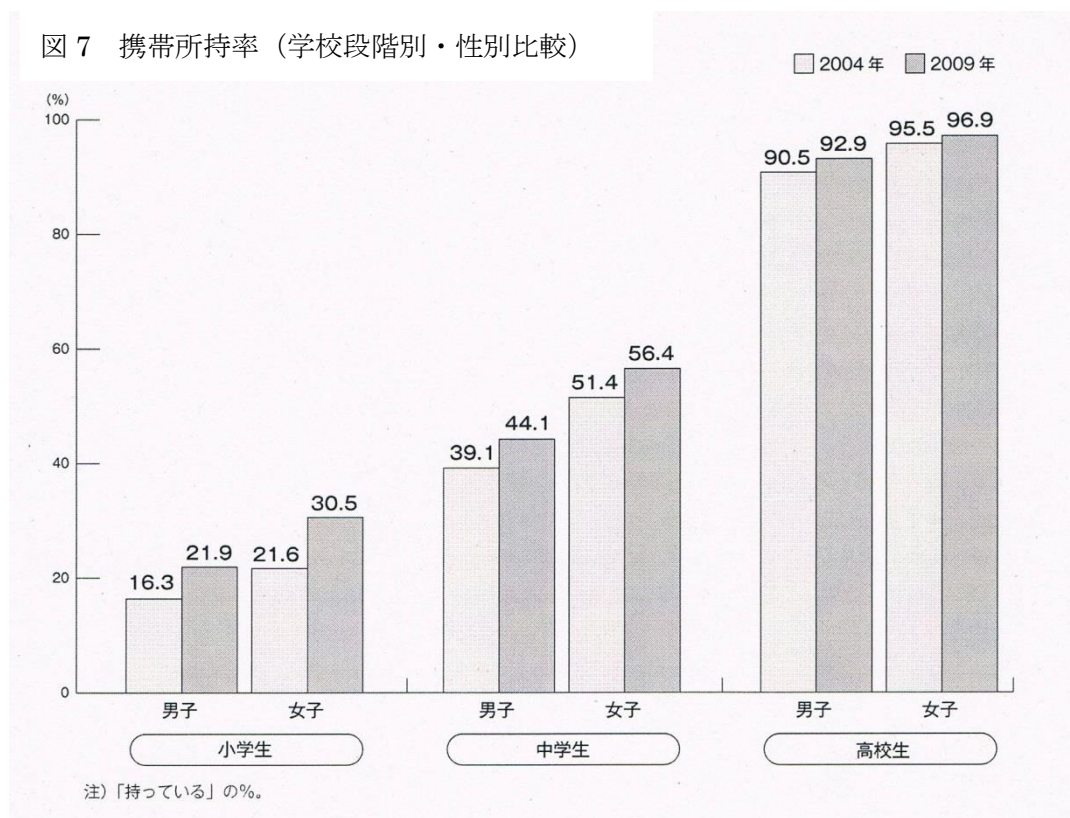


図 8 携帯所持率（経年比較）

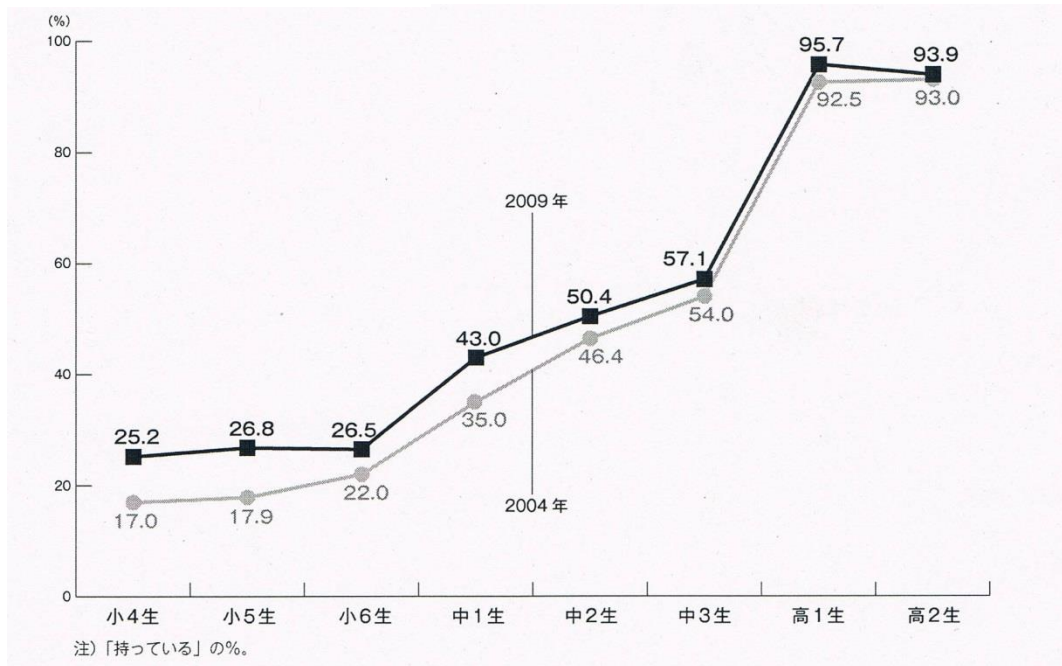
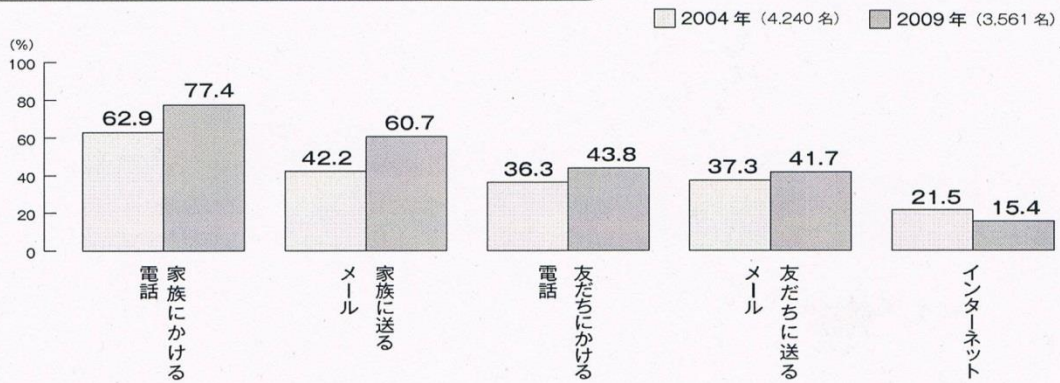


図 9～11 は携帯所持者に対して、現在「1日のうちで携帯をどのくらい使いますか」とたずね、「家族にかける電話」「家族に送るメール」「友だちにかける電話」「友だちに送るメール」「インターネット」の5項目のうち、「使用している」（「1～2回くらい」+「3～5回くらい」+「6～10回くらい」+「11～20回くらい」+「21～50回くらい」+「51回以上」）回答を示したものである。小学生の段階では家族にかける電話が中心であり、またメールに関しても「家族に送るメール」が60%を占めた。それに対し、中学高校生では「家族にかける電話」は60%を割っている一方で「友達に送るメール」が90%近くであった。このように携帯の普及率が上がる中学高校生の段階から、携帯コミュニケーションにおいて家族から友人へ、通話からメールへの移行が見られる。全体的な傾向としてもメールの相手は主に「友だち」であり、メールの方が通話よりもプライベートで利用されがちなのである。

図2-2-11 携帯でしていること（小学生、経年比較）

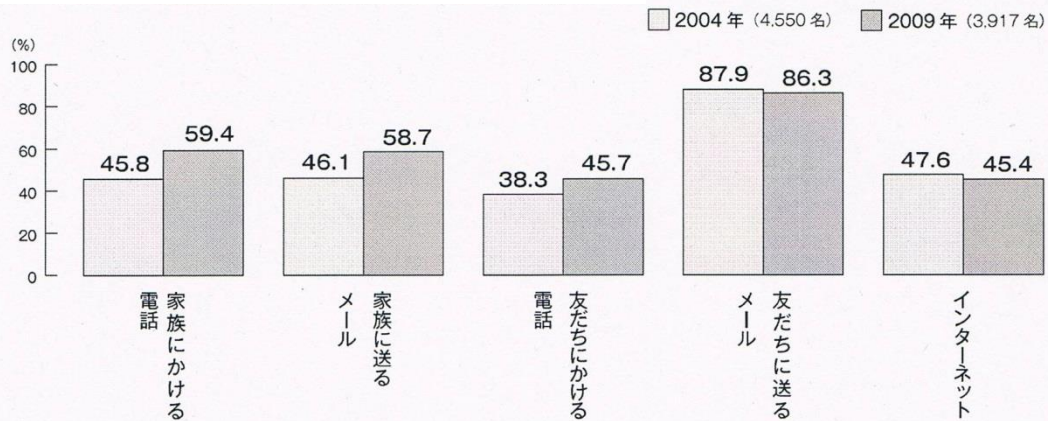


注1) 携帯電話を「持っている」と回答した人のみ対象。

注2) 「1～2回くらい」+「3～5回くらい」+「6～10回くらい」+「11～20回くらい」+「21～50回くらい」+「51回以上」の%。

図9 携帯でしていること（小学生、経年比較）

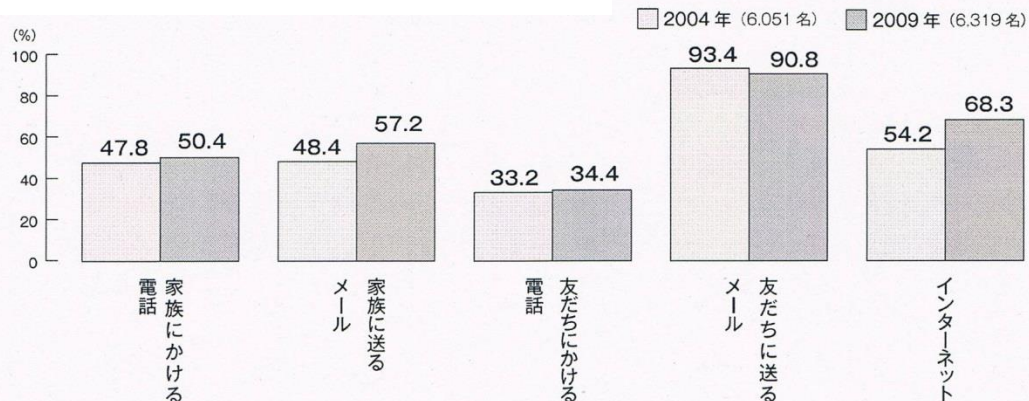
図10 携帯でしていること（中学生、経年比較）



注1) 携帯電話を「持っている」と回答した人のみ対象。

注2) 「1～2回くらい」+「3～5回くらい」+「6～10回くらい」+「11～20回くらい」+「21～50回くらい」+「51回以上」の%。

図11 携帯でしていること（高校生、経年比較）



注1) 携帯電話を「持っている」と回答した人のみ対象。

注2) 「1～2回くらい」+「3～5回くらい」+「6～10回くらい」+「11～20回くらい」+「21～50回くらい」+「51回以上」の%。

注3) 2004年・2009年とも、一部の学校で「無回答・不明」が多かったため、学校単位で集計から除外している。

実際のメールのやり取りの量については、モバイル社会研究所が「2010年一般向けモバイル動向調査」という調査を行っている。その調査の「昨日携帯から受信・発信したメールの受発信数合計」を見ると、10通以内のやりとりが一般的であることが言えた。

(図12)しかし10代、20代の若年層に注目してみると、1日50通以上やりとりをしている若者も一部おり、逆に0通という人はほとんどいなかった。10代、20代の若者はおおむね1~20通程度のやりとりをしているのだ。(図13)

図12 携帯メールの受信件数 (n=2,542)

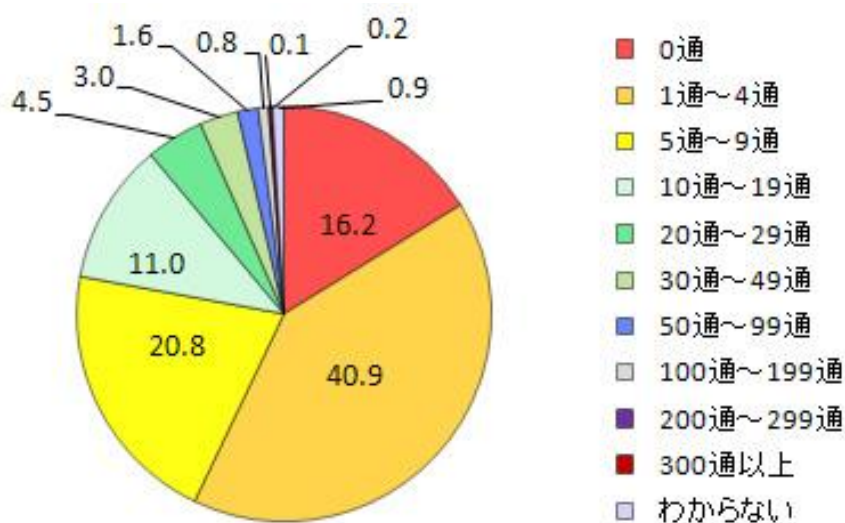
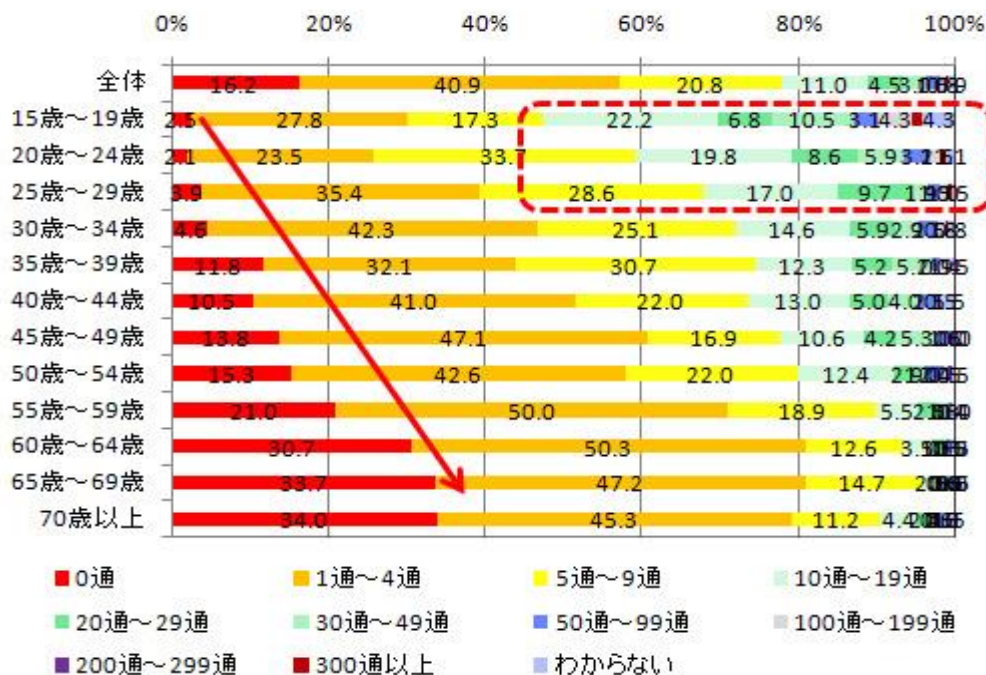


図13 昨日携帯電話から受信・発信したメールの件数 (n=2,542)



このように多くの若者が携帯のメール機能を利用し、日々絶え間ないコミュニケーションを行っている。この通話よりメールを多く利用するという特徴と「番通」を活用するという特徴から「状況に応じて友人を選択する」という今日の若者の新しい人間関係を見出すことができる。(松田 2000)「番通」を活用することによってかかってきた電話番号を確認し、その時の気分などをもとに出るか出ないか選択する。「『番通』で相手を確認し、電話に応答するかどうかを決める」「たまり場で誰かが通りかかるのを待つのではなく、携帯で連絡を取って会う」といった行動は、連絡をとる相手や直接会う相手の「選択」である。いつでもどこでも連絡が取れる個人専用の携帯電話で、今いる場所や現在所属している集団にとらわれず、好きな相手や気の合う相手とつながるのである。

また松田氏は、メールは通話以上に人間関係を選択的にすると述べている。ここでいう選択的な人間関係とは、連絡を取ることが可能な友人がより多い状況にあるという状況である。友だちが 10 人いて、いつもその 10 人と一緒に遊んでいる人よりも、友だちが 100 人いる人の方が、今日は誰と遊ぼうかと遊ぶ友だちを選ぶことができるので、選択的であると言える。つまり、人間関係を選択的にするということは、人と関係を結ぶ可能性を広げるということを意味する。その点でメールは通話よりも、相手と連絡をとる可能性を広げる。なぜなら、メールの方が気軽に相手に連絡をすることができるからだ。通話の場合、電話をかける側は好きなときにかけることができるが、かかってきた側はどんな状況でも応答しなくてはならないという暴力的な面を持つ。そのことを電話をかける側もわかっているため、相手がどんな状況にあるのかを一度考えてからではないと電話をかけることができない。一方メールの場合は、そのように相手の状況に気を遣うことがなくて済む。文字によるコミュニケーションは、お互い好きなときにメッセージの読み書きができることから、状況に縛られることなく連絡を取り合うことができるのである。例えば、仕事をしている人に連絡をとりたい場合、通話だと「昼間は仕事をしているから、夜でないといけないな」と思い、電話をかけることをためらってしまう。しかし、メールだと用件を送っておいてしまえば、急な用件でない限り、「仕事の合間にでも返信してくれればいい」と思い、気軽に連絡をとることができる。このように、比較的相手の状況に気を遣わずに連絡をすることができるメールは、連絡をとることができる可能性を広げるため、通話よりも人間関係を選択的にするとと言えるのである。

もう一つの理由は、メールはメールアドレスを変更した際に相手に教えなければ、アドレスしか教えていない相手からは自分に連絡を取ることができなくなるからである。電話番号は変更することが困難であることを考えると、メールは容易につきあう友人を選択することができるのである。

次節ではこの選択的な人間関係も含めて、携帯電話が若者の人間関係に与えている影響を詳しく見ていく。

第2節 携帯利用と人間関係との関連

本節では、岩田考が2011年に行った調査（岩田2014）をもとに、携帯電話が今日の若者の人間関係にどのような影響を与えているのかを見ていく。

結果を分析していく前に、この調査ではどのような質問をしたのかを紹介する。この調査においては友人関係について、友人数と友人とのつきあい方に関する質問をしている。友人数については、「日頃親しくつきあっている」友人の数を、以下の2つに分けて尋ねた。

「こちらから会いに行くのに1時間以内で会える友人」＝＜身近な友人数＞

「こちらから会いに行くのに1時間より多くかかる友人」＝＜遠方の友人数＞

友人とのつきあい方に関しては10の質問をしている。質問は＜希薄化＞と＜選択化＞に関連した項目に大きく2つに分けることができる。いずれも以下に紹介する2つの選択肢のうちどちらに近いかを選択してもらった。＜希薄化＞に関する項目は以下の4つである。

＜関係拡大志向＞

「今の友人も含めて、さらに友人の輪を広げたい」

⇔（「新しい友人を作るよりは、今の友人と仲良くしたい」）

＜浅い関係志向＞

「友人であっても、互いのプライベート（私的なこと）には深入りしたくない」

⇔（「友人とはプライベート（私的なこと）も含めて、深くかかわりたい」）

＜消極的な自己開示＞

「親友であっても自分の全てをさらけ出すわけではない」

⇔（「親友とはお互い裏の裏まで知っている」）

＜摩擦回避＞

「友人とは互いを傷つけないようにできるだけ気を使う」

⇔（「友人とは互いに傷つくことがあっても思ったことを言い合う」）

＜選択化＞に関する項目は以下の6つである。

＜友人の使い分け＞

「場合に応じて、いろいろなつきあうことが多い」

- ⇒ (「たいていの場合、同じ友人と行動をともにすることが多い」)
- ＜自己の可変性＞
- 「話す友人によって、相手に対する自分の性格が変わることがある」
- ⇒ (「どんな友人と話していても、相手に対する自分の性格はほとんど変わらない」)
- ＜関係の隔離＞
- 「あなたの友人の多くは互いに知り合いではない」
- ⇒ (「あなたの友人の多くは互いに知り合いである」)
- ＜関係の即時形成＞
- 「知り合っただけで友人になることができる」
- ⇒ (「友人になるのに長い時間がかかる」)
- ＜部分的な関係：氏名＞
- 「友人のフルネームを知らなくても気にならない」
- ⇒ (「友人のフルネームは必ず知っておきたい」)
- ＜部分的な関係：所属＞
- 「友人の職業や所属を知らなくても気にならない」
- ⇒ (「友人の職業や所属は必ず知っておきたい」)

これらの項目が携帯電話の利用との関連によって、どのように変化しているのかをこれから見ていくことにする。なお、この調査においては比較の意味もあり、PCインターネットの基本的な利用との関係もあわせて示している。

まずは友人の数と携帯利用の関係である。2001年から2011年の10年間で、「日頃親しくつきあっている」友人の数のうち＜身近な友人数＞、＜遠方の友人数＞ともに減少している。しかし携帯電話への登録件数は20代～30代を中心に全年齢的に増加している。大学生調査でも、調査対象の4人に1人からは、相手が誰であれ、自分の携帯番号を教えることに抵抗がないという回答が返ってきている。どのようなつながりであるかは別として、携帯を介したつながりは全体として拡大している傾向にある。また、携帯の基本的な利用と友人関係の関連を見てみると、携帯を介したインターネットの「平日利用時間」が長いほど「遠方の友人数」が多く、「携帯メールの送信数」が多いほど＜遠方の友人数＞、＜身近な友人数＞ともに多くなっている。インターネットの利用時間に関しては、常に新しい情報を取得することによって、遠くにいる友達とも話題を共有することができるため関係を維持できているのだと推測される。このように携帯電話を使ったコミュニケーションは友人関係を広くする傾向にあると考えられるのである。しかしこれは一方で、社交性に関する疑似相関である可能性も考えられる。つまり、携帯電話が友人関係を広くしたのではなく、もともと友人関係が広い人ほど携帯電話を使っているという可能性もあるのである。

次に友人のつきあい方と携帯利用の関係を見ていく。これに関しては、2011年の調

査で非常に多くの有意な相関が見られた。携帯やPCインターネットの利用量（携帯でのインターネットの平日利用時間、携帯メールの送信数、PCインターネットの平日利用時間）が多いほど＜関係拡大志向＞が強い傾向が見られた。逆に＜浅い関係志向＞や、＜消極的な自己開示＞、＜摩擦回避＞など表層的な関係に関する項目は、携帯やPCインターネットの利用量が多いほど弱い傾向が見られた。つまり、携帯電話やPCインターネットを多く使う人ほど友人関係を広げていきたいと考えており、その友人ともプライベートも含めてお互い自分の全てをさらけ出し、深いかかわりを望んでいる。このことから、携帯やPCインターネットの利用量が多いということは、コミュニケーションに対して積極的なことを意味し、濃密で深い関係の志向と結びついていると考えられる。また、＜選択化＞に関する項目では、＜自己の可変性＞で最も多くの関連が見られた。携帯やPCインターネットの利用量が多いほど、＜自己の可変性＞が高くなる傾向があった。これは、「番通」やメールなどの携帯機能が人間関係を選択的にする傾向にあることが関係しているのではないかと考えられる。携帯を利用することによってやりとりをしてつきあう人数が増えると、様々な人とつきあっていかなければならなくなる。自分と意見がものすごく合う人もいれば、自分と性格が合わないという人もいるだろう。携帯の利用量が多いほど、＜関係拡大志向＞が強い傾向にあるという結果も出ているように、関係が拡大すればそれだけいろいろな性格の人とつきあっていきことになるので、それぞれに自分の性格を変えて接する人が多いのではないかと推測される。しかし、年齢階級別では、関連性が見られる項目は少なくなる。＜自己の可変性＞は、全年齢では、携帯やPCインターネットの利用と多くの関連が見られたが、年齢階級別では10代の一部の項目において正の関連が見られるのみであった。

第3節 携帯利用以外の要因と人間関係の関連

前節では、携帯およびPCインターネットの利用と人間関係の関連を見た。本節では、他の要因を統制した際にも、携帯およびPCインターネットの利用と友人関係に関連があるのかを分析することで、両者の関係をさらに検討してみることにする。以下では、前節で用いた携帯やPCインターネットの利用に関する変数以外に、性別、年齢、婚姻状況、子どもの有無、就学状況、学歴、世帯収入、都市度、地域の10の変数を用いている。

まずは、どのような要因が友人数に影響を与えているのかを見ていく。＜身近な友人数＞と＜遠方の友人数＞ともに、学生でその数が多いということが共通している。また、「世帯収入」が高いほど、＜身近な友人数＞と＜遠方の友人数＞が多く、「学歴」が高いほど、＜遠方の友人数＞が多い傾向が見られた。逆に「学歴」が高いほうが、＜身近

な友人数>が少ない傾向があった。このように経済的要因と人間関係に関連が見られるのである。大学等に進学する者が離れた友人関係を形成するのに対し、大学等に進学しない層では友人関係が身近な範囲に留まる傾向があるようだった。携帯利用との関連では、「携帯インターネットの平日利用時間」は<身近な友人数>と負の関係にあるが、「携帯メールの送信数」は<身近な友人数>と<遠方の友人数>の両者と正の関連がある。また、「携帯の利用期間」は<遠方の友人数>と正の関連を示している。これらに対して、PCインターネットの利用と友人数との有意な関連はほとんど見られなかった。携帯利用は、PCインターネットの利用に比べると友人数との関連は強く、利用期間が長期化することによって、友人関係が蓄積することを示していると言える。

次に、友人とのつきあい方に影響を与える要因を検討する。ここでは、<希薄化>に関する項目と<選択化>に関する項目の順に見ていく。

<希薄化>に関する項目のうち、<関係拡大志向>に最も影響を与えているのは学生か否かである。学生の方が<関係拡大志向>が強くなっている。これは、大学等に在る方が周りに多くの方がおり、違う講義を受けるとその度に違う人と空間を共にしたり、コミュニケーションをとる機会が与えられるためだと考えられる。携帯利用との関連では、「携帯でのインターネット利用時間」が長いほど、<関係拡大志向>が弱くなる傾向があるのみで、他に有意な関連はあまり見られなかった。ただし、パソコンからの利用も含めてSNSを利用している者で、<関係拡大志向>が強くなっている。その他の3つの項目に関してだが、年齢が高いほど3つの表層的な項目が高い傾向にあった。つまり、年齢が高いほど表層的な関係を志向し、築いているということが共通していた。若者よりも年齢が高い層で、浅い関係を志向し、自己開示が消極的で、摩擦を回避する傾向がある。年齢によって質問文の受け取り方などに違いがあることなども考慮しなければならないが、このことから、友人との関係が希薄化しているのは若者ではなくむしろ中高年であるといえる。

<選択化>に関する項目のうち、<友人の使い分け>は「SNSの利用」、「携帯メールの送信数」、「PCインターネットの利用時間」と正の関連がある。それに対して、<自己の可変性>は、携帯やPCインターネットとの関連は弱く、「携帯メールの送信数」と正の関連が見られるのみである。

この節における分析でも、携帯電話の利用が人間関係にどのような影響を与えているのかが明らかになった。その他の要因の中でも「学生か否か」が、友人数と友人とのつきあい方のうち<希薄化>の項目の2項目と関連が強いことがわかった。学生であるほど友人数が多く、友人の輪を広げたいと考えている。大学生等は、仕事をしている人などと比べると比較的自由な時間が多い。その分友人と関わる時間が増える。また大学生の場合、講義や就職活動などで様々な人と関わる機会がある。このような環境の中で、学生を中心とした若者たちは、携帯電話を駆使して人間関係を形成している。逆に、中高年の世代では、表層的な項目が高い傾向にあった。仕事をしていると、職種にもよる

が、職場という限られた範囲での人間関係しか結べなくなり、かつやりとりの内容も事務的なものだけになっていってしまうため、このような結果が出たのだと考えられる。つまり、本節の分析からは、人間関係が「希薄化」しているのは若者ではなくむしろ年齢層が高い世代の人たちなのだとと言える。

第4節 分析結果のまとめと補論

ここで2節、3節で見てきた分析結果をまとめていく。

携帯の利用は、友人関係の<希薄化>を促進するものではなく、むしろ<濃密化>を促すものと考えられる。実際に、携帯メールはパソコンでの電子メールに比べて、近くに住んでいる人とのコミュニケーションに使われることが多く、異なるネットワークに所属する人との関係を広げるというよりも、身近な人間関係を強化するものであると言われている。(宮田 2005) また、携帯やPCインターネットの利用が友人関係の<選択化>を促進する可能性が見られた。友人関係自体の変化としては、この10年間で、強固な自己による機能的な友人関係の使い分けという選択から、場面や状況によって自分を変化させながら関係を築いていくような状況志向的な<柔軟な関係>が一般化したという変化が見られた。しかし、携帯利用が促進する選択的な関係は、どちらかといえば機能的な使い分けである。なぜなら、携帯利用のうち<自己の可変性>と特に正の関連が見られるのは「携帯メールの送信数」であり、メールは相手の状況に気を遣わなくて済むため、そもそも状況に応じて自分の性格を変化させる必要がないのである。面と向かって話す会話のような声によるやりとりの場合、その場の空気や相手によって話し方や声色を変えて接しなければならない。一方メールのような文字によるやりとりの場合、目の前に相手がいるわけではないので、自分を変える必要はない。そのため、携帯利用が促す選択的な関係は、強い主体を想定するような機能的な使い分けによる関係である。

これら携帯電話の利用が人間関係に与えた影響に、「やさしさ」の変容も関連していると考えられる。携帯電話を利用する人ほど、友人とお互いにプライベートをさらけ出し深くかかわりたいと考えていることが、第2節の調査で明らかになっている。若者にとっての「やさしさ」の意味が変化し、行動する前に一度相手のことを考えるようになった。「相手にとっての『やさしさ』とは何か」、「どうすれば相手のためになるのか」を考えて行動するようになったことで、より相手のことを知ろうとするようになったと考えられる。相手のことを深く知っていれば、相手のためになるような行動がしやすくなる。相手のために何ができるかを考えることが、結果的に「本当の自分」を見せ、相手と深くかかわりたいという意識につながっているのだと考えられる。携帯電話は相手と

より長くつながっていることを可能にするため、相手のことをよく知ろうとするには最適のコミュニケーションツールであると言える。また、このような人間関係の＜濃密化＞だけでなく、＜選択化＞にも「やさしさ」の変容は関連している。携帯メールには通話のような、返信を強要するような暴力性はない。メッセージを送るのに余裕があり、相手のことを考えて文章を考える時間がある。そしてその時間を利用し、相手のことを考えたうえでやりとりをするということは、相手によってつきあい方を変えるということでもある。用意された時間を使い、相手に合わせた言葉を選んで接するような選択的な関係を築くようになったと考えられる。

最後に付け加えとなるが、携帯電話にはもう一つ人間関係に関する興味深い機能がある。それは友人関係を維持する機能である。友人関係の維持には二つの程度がある。一つは、普段はほとんど連絡をとらないが、年賀状で1年に1回はやりとりをするというような、限りなくゼロに近いがゼロではない関係である。もう一つは、やりとりをしているうちに関係がどんどん深まっていくような維持の仕方である。携帯でのやりとりの場合、その特徴が、どこにいても相手と連絡が取れるという点にある。2011年のモバイル・コミュニケーション研究会の調査において、「あなたが携帯電話をかける場所としてどこが多いですか」という質問に対して、利用者の70%が「自宅」と答えている。これに対して、「路上・街頭」で携帯をかけたという回答は27%しかいなかった。また携帯メールに関しても、外出先よりも自宅で使用する利用者の方が多いことがわかっている。この結果から、外出先で事務的な用件を話すために連絡を取るよりも、自宅に帰った後でも友人と他愛もない会話を楽しむことで友人関係を深く、濃密にしていることが考えられる。しかし、外で移動中も相手と連絡できることが連絡の可能性を増すことは間違いない。(石井 2014) そこで、「携帯を使う場所」と「携帯メールの送信数」の二つの項目と「友だちの数」の関係をそれぞれ比較した結果、単なる携帯の利用頻度より外出先で使うかどうかという利用形態の方が、友だちの数と関係が深いことがわかった。このことは、携帯の利用頻度が対人関係を促進するというよりは、友だちと途切れなく連絡する利用の仕方が友人関係の維持に貢献していることを示唆している。しかもその維持とは、関係を徐々に深めていくような維持の仕方である。しかし、携帯に相手の連絡先を残しておいてさえいれば、いつでも連絡をすることはできるので、携帯はもう一方の限りなくゼロに近い維持の仕方にも貢献していると考えられる。つまり、今回の調査だけでは携帯電話がどのように友人関係を維持しているのかはわからない部分があるのである。

再度、携帯電話が人間関係に与える影響をまとめると、携帯は人間関係の＜濃密化＞を促し、＜選択化＞を促進する可能性を持ち、人間関係をある程度維持することに貢献しているのである。

第5節 携帯電話がつくる人間関係の問題点

これまでの分析で、携帯電話が人間関係に与える影響として、人間関係の〈希薄化〉、〈濃密化〉の促進、そして友人関係の維持を挙げてきた。これらの影響は主に携帯の「いつでもどこでも相手と連絡がとれる」という特徴からきている。しかしこの特徴が、主に若者の人間関係において新たな問題を生じさせている。本節では、携帯がつくる人間関係の問題点について考察していく。

人間関係をより選択的にしている大きな要因の一つが、携帯のメール機能である。通話のようにどんな時でも応答しなくてはならないといった暴力的な面を持たず、お互い好きな時にメッセージのやりとりができ、メールアドレスを変更した際にはそれを教える相手を選ぶことで、連絡をとれる相手を選択することができる。しかし、この携帯メールによるコミュニケーションにおいて問題が生じる可能性がある。

一つは、メッセージの「誤読」という問題である。携帯メールのような文字によるコミュニケーションは対面コミュニケーションと異なり、表情や手ぶりなどのノンバーバル（非言語的）・コミュニケーションがなく、感情やニュアンスを伝えたり読み取ったりすることが難しい。特に携帯メールは比較的短いメッセージになるために誤解を招く恐れが強い。このことを解決しようとして登場したのが、絵文字や(^o^)、(-_-;)などの顔文字である。絵文字や顔文字の利用は、文字コミュニケーションの制限を乗り越え、携帯メールに送り手の気持ちやニュアンスを込めることを可能にした。しかし、絵文字や顔文字が登場したことによって、これらが使用されず句読点だけの場合、よりそのメールを「冷たい」と感じる若者が増えたと考える。例えば、自分が忙しいときにメールを返信しなくてはならないとき、絵文字や顔文字を選ぶ時間があったいため、句読点だけのメッセージを返したとする。その場合、送り手が相手に対して冷たくするつもりはなくても、忙しい状況を知らない受け手は「冷たい」と感じるかもしれない。その歪みが最悪の場合、後の人間関係に影響してしまう。このように絵文字や顔文字の使用がメッセージの「誤読」を促進する可能性があるのである。

もう一つの問題点は、「送られてきたメールに対してなるべく早く返信をする」という「メール作法」の一つである。この「メール作法」の背景には、メール・コミュニケーションが普及するにつれて、用件だけのやりとりから、やりとりが続くこと自体が目的となるコンサマトリー（自己充足的）なメール文化が挙げられるだろう。（松下 2012）このコンサマトリーなやりとりは、固定電話を使っていた時代から行われていたことだが、現在では携帯電話における通話やメールによって多く行われている。前節でも、今日の若者は、親しい友人とは深くて真面目な話よりも他愛もない会話を続ける志向が高いということを述べた。相手が返したくなるためのメールの書き方などを指摘した「メール術」関連の書籍が多く出版されるようになったのはその証左だと言える。このように若者を中心に携帯メールがコミュニケーションの中心手段になっていくにつれて、

「メール上手＝コミュニケーション上手」という図式が成立するようになった。コンサマトリーなコミュニケーションが一般化すると、返信がないことへの不安が見られるようになる。小林哲生らの2005年の調査では「携帯メールが長くこないと、不安になりますか」という質問に対し、「しょっちゅうなる」が6.5%、「ときどきなる」が37.2%であり、年齢が若いほどその割合が高くなる傾向が見られた。また、不安になるまでの時間に関しても、10代の中高生世代は2時間以内が34.2%、2時間以上4時間未満が19.5%、4時間以上6時間未満が22.0%という結果になり、他のどの年代よりも上回っている。携帯メールはコミュニケーションの欲求を引き出し、叶えるメディアであり、実際に若者たちは携帯を片手に「絶え間ない交信」を行うようになった。しかしそれと同時に、携帯はそれまで存在しえなかったコミュニケーションの強制や返信がないことへの不安をつくりだした。メールだけではなく通話に関しても同じことが言える。たとえば、それまで頻繁に電話で話をしてきた相手から電話がかかってこなくなったとき、「自分は嫌われてしまったのだろうか」「自分が何か相手を傷つけるようなことをしてしまったのだろうか」というような不安になってしまうことがある。また、電話のそばを一瞬離れることによって、親密な相手とのコミュニケーションというせつかくのチャンスを逃すことになるかもしれない。電話が存在するから苦しいのではなく、人間関係がうまくいっていないから（もしくは、うまくいっていないと思えるから）苦しいはずであるのに、携帯を所有しておくことで、相手との関係に望みをかけて苦しみを長引かせてしまう若者は多いのではないかと考えられる。いずれにしても携帯電話は、それを多用する若者におけるコミュニケーションの強制や不安を加速させたのだと言える。これらの強制や不安が発展し、いじめや、対人関係のストレスによる不登校などの問題につながるのではないかと私は問題視している。

なぜ若者は、メールの返信が来なかったり、電話がかかってこないと不安にあるのだろうか、それは、メディアは人間関係を映す鏡だからであり、自我形成に関わるコミュニケーションにおいて大きな意味を持っているからである。(羽瀨一代 2008) このことに関して C.H.クーリーは、自分の行動が他人の反応を引き起こし、自身がどのような意識をもつかによって、自我が形成されると考えた。私たちは、他者という鏡に映しだされた自分を見ながら日常生活を送っている。「友だちが私のことをわがままだと思っているのではないか」「母親は私のことを子ども扱いしている」などといったように、他者は自分のことをこんなふうに評価しているのだろうと想像しながら生活をしている。これを「鏡に映った自己 (looking-glass self) という。「わたし」という存在は、社会的には他者の存在なしではありえない。誰かによって意味づけられ、承認され、はじめて「わたし」がある、という意味である。よって、「わたし」に対する評価を気にせず生きている人は、まず存在しないと言える。(羽瀨 2008) この鏡を携帯電話に置き換えて考えてみる。携帯を使用することで、他者の評価を「客観的」に測定することもある程度可能になる。なぜなら、携帯にはどんな人がどんな時にどのくらいの割合で

「わたし」の携帯に電話をかけてきたのか、またはメールを送ってきたのかが残るからである。このような「客観的」な測定値は、所属する集団のなかにおける「わたし」の他者評価を反映する。だからこそ、かかってこない電話やメールの内容などで、人間関係に対して不安に感じてしまうのである。

第4章 人間関係に対する LINE の影響（インタビューからの考察）

ここまでの話の展開を一度整理する。1章では、若者の人間関係が近年希薄化してきているという論を紹介し、その人間関係希薄化論に携帯電話がどのように関わっているのかを検討してきた。そこでは、若者にとっての「やさしさ」の変容が、人間関係は希薄化していると言われる大きな要因であることがわかった。2・3章では、携帯電話は人間関係の希薄化を促進するのではなく、むしろ人間関係をより深いものにし、やりとりする相手を気軽に選ぶという選択的な関係を促す可能性があることを、「やさしさ」変容と関連を述べながら明らかにしてきた。そして、携帯電話が普及してきたことによって形成されるようになったこの新しい関係の中で、さらなる問題点が出てきたことを考察してきた。

本章では、今では日本で3千万人以上の人が使っている携帯機能「LINE」について考察を行う。LINEとは、メールのように文字で相手とやりとりを行うメッセージアプリである。しかし、様々なメールにはない機能が追加されており、文字によるコミュニケーションだけではなく、「無料通話」という声によるコミュニケーションも可能になっている。今では通話やメールと並ぶ、一種のコミュニケーションツールとなっている。LINEが登場してからまだあまり時間が経っていないため、LINEと人間関係の関連についての研究はあまりされていない。そこで私は、このLINEが、携帯電話の普及が人間関係に与えた影響にかかわっていったのか、LINEの使用によって人間関係はさらに変化したか否か、そして、LINEが広まったことで新たな問題点があるのかどうかなどに関する問題提起をし、大学生に対するインタビューをもとに考察していく。

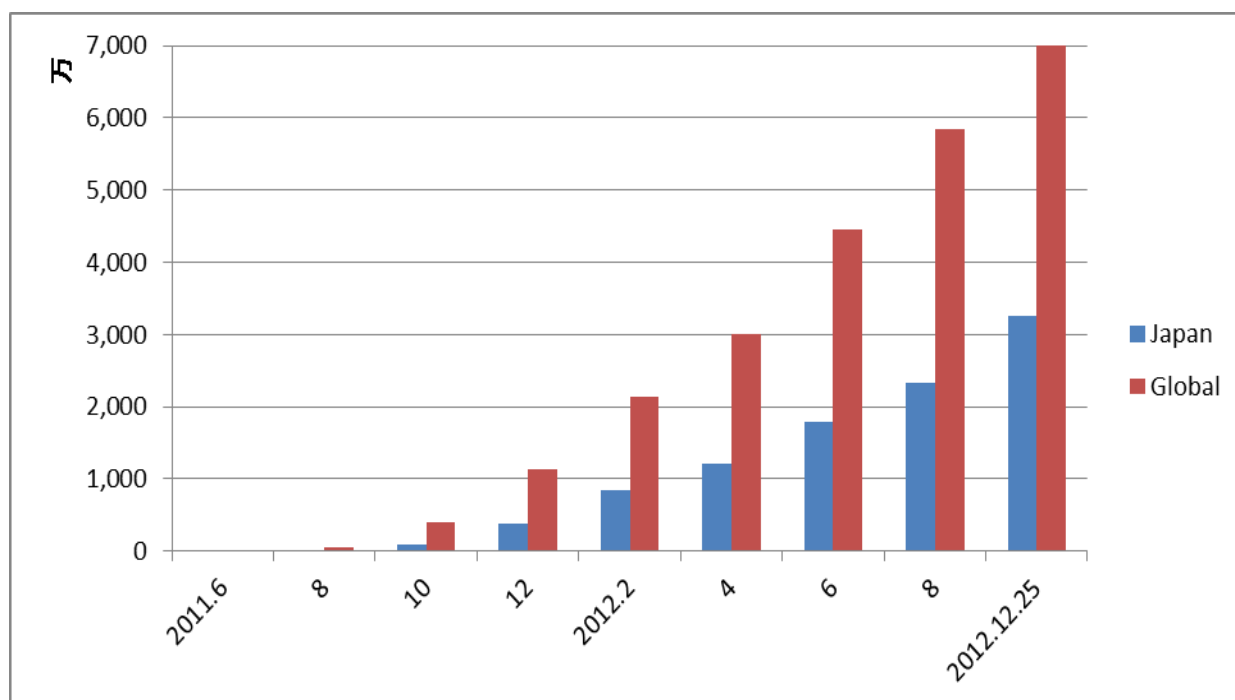
第1節 LINEとは

本節では、そもそもLINEとはどのような機能なのかを紹介していく。

LINEは日本の企業である「NHK Japan」が開発し、2011年6月に世間に登場した。LINEのユーザー数は全世界で毎月500万人のペースで増え続けている。2011年度

(2011年4月～2012年3月)の日本におけるスマートフォンの出荷台数は2417万台である。2012年3月末時点において、LINEのユーザー数は国内1056万人と発表され、2012年10月末時点では3200万人を超えている。国内においても爆発的にユーザーを獲得していったことがわかる。

図14 LINE登録者の推移(万人)



LINEを企画・開発した「NHK Japan」は、LINEの利用者の属性と利用傾向について調査を行った。その調査結果によると、男女比は男性51%：女性49%でほぼ半々となった。職業は会社員が38.5%で最も多いが、それに次いで学生が30.3%を占めている。年齢別でも、12～19歳が16.5%、20～24歳が22.6%、25～29歳が21.9%と30歳未満の年代で過半数を占めている。まだ比較的新しいサービスであるため、高年齢層には浸透していないということもあるが、LINEのユーザーは若者が多いようである。利用回数に関しても、全体では「毎日」が37%、「週4～5回」が17.1%だが、10代男子「毎日」50%、10代女子「毎日」60.5%と、若者の間で頻りにLINEを使っているのやりとりが行われていることがわかる。

図 15 年齢別利用者 (%)

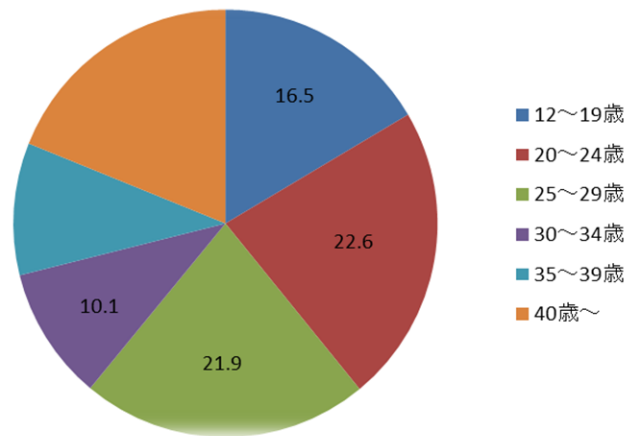


図 16 職業別利用者 (%)

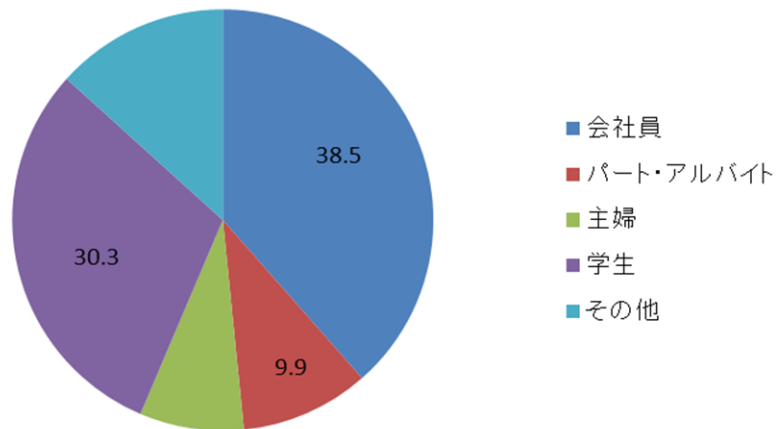
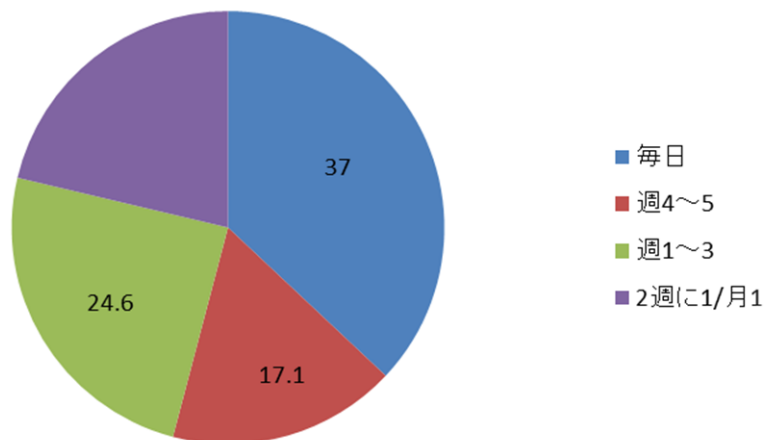


図 17 利用回数 (%)



では、LINE はどのような機能を有したサービスなのかを見ていく。LINE はそもそも、スマートフォン・携帯電話向けの無料のテキストチャットのアプリとして開始された。「テキストチャット」とは、リアルタイムに文章でやりとりをする機能である。携帯電話のショートメッセージと似ているが、LINE ではメールでいう宛先や件名を打ち込む必要がなく、メールのようにメッセージを送ってから返信が来るまでのタイムラグがほとんどない。一行くらいの短文メールが、ほぼリアルタイムに次々とやりとりされていくのがテキストチャットの特徴である。

LINE は1対1のやりとりだけではなく、複数人のやりとりも可能にする。それが「グループチャット」という機能である。グループチャットは、複数の人数で、同時にテキストで会話をすることでできるため、ミーティングや待ち合わせの連絡をするときに利用する人が多い。例えば、部活で大会に行く前日に、集合する時間と場所を連絡するとき、メールの場合、部長が部員一人一人のメールアドレスを検索して打ち込み、一斉送信しなければならない。しかしLINE の場合は、「〇〇部」というグループを作っておけば、部長が送信した集合時間と場所を部員全員がほぼリアルタイムで見ることができるのである。

メールにはなかったLINE の特徴的な機能として「スタンプ」というものがある。スタンプとは、携帯メールにあった絵文字や顔文字よりも大きなサイズで、様々なキャラクターがデザインされている。それを、テキストチャットの文章の途中に送ることができるのである。スタンプには数多くの種類があり、様々な感情を表すものがある。「嬉しい」「悲しい」「楽しい」「悔しい」「腹が立つ」などの一般的な感情はもちろん、その感情と感情の間のような微妙な感情を表現するのにも役立っている。単純に、メールにおいて使われていた絵文字や顔文字では表現できなかった感情を相手に伝えることができるようになったため、スタンプは文字コミュニケーションにおける感情表現の幅を広げたと言ってもよいだろう。現在では、キャラクターと一緒に「Thank You!!」や「おやすみ～」などのメッセージがついたスタンプも登場している。それらを利用することで、どんな言葉で返信したらよいか迷ったときに、とりあえず自分の感情だけ伝えておくことができるのである。今では、スタンプだけでやりとりが進行していつってしまうほどである。

これらの機能のほかに、LINE が流行するきっかけとなった機能が「無料通話」である。そもそもLINE でやりとりできるのは、友だちリストに登録されている人で、その友だちリストの作成には携帯電話内のアドレス帳が使われる。つまり、LINE のユーザー登録をするとアドレス帳の内容がLINE のサーバーにアップロードされ、お互いに電話番号を登録している人が友だちリストに現れるのである。そしてその友だちリストにいる人となら、無料で通話が可能になる。

他にも様々な機能があるが、若者を魅了し、LINE という新たなコミュニケーションツールに飛びつかせたのは、以上のような機能が現在の若者の人間関係形成に大きく貢

献しているからであろう。次節では、この LINE の機能と若者の人間関係の関連を詳しく考察していく。

第2節 なぜ若者は LINE を使うのか

LINE が若者に多く支持されている要因は、前節で紹介したような、これまでコミュニケーション手段の主流だった携帯メールにはなかった機能を持っているからであろう。本節では、第3章で述べた若者の携帯利用の特徴と関連付けながら、その要因を考察していく。

まず、それまでの携帯メールの「いつでもどこでも」相手と文字によってコミュニケーションをとることができるという特徴を引き継ぎながらも、LINE は全く同じことを少ない手間で行うことができる。連絡をとりたい相手を瞬時に選び出し、すぐに伝えたいことを送信することができる。さらに、LINE には相手が自分が送ったメッセージを読んだかどうかを確認することができる。相手がメッセージを読んでいれば、メッセージの横に「既読」と表示される。そのため、相手が今連絡を取り合える状況にあるかある程度確認することができ、効率よくやりとりができる。若者の携帯利用の特徴として、自宅での使用率が高く、自宅にいるときでも他愛のない会話を楽しむことが、友人関係の濃密化に貢献しているということは先述した通りである。この点に関して LINE は、少ない手間ですら効率よく友人とやりとりできるということは、単純に友人とつながっている時間が増えたということである。その意味で、LINE は若者の深い人間関係を形成するのに役立っていると言える。

そしてもう一つ若者を引き付けた機能は「無料通話」である。若者の携帯の機能において、通話よりメールを多く使用する。その理由の一つに、「通話料金が安いから」というものがあつた。無料通話は文字通り、この理由を解決している。LINE は文字によるコミュニケーションと声によるコミュニケーションを並行して使うことを可能にしている。何か重要な連絡事項を相手に伝えたいとき、文字を打つ手間ももたない状況であつたら即座に通話に切り替えることができる。

LINE は選択的な人間関係にも影響を与えていると考えられる。先述したように「選択的な人間関係」とは、相手と連絡をとれる可能性が広い人間関係のことを指す。LINE において、この可能性を広げているのは「グループチャット」である。グループチャットでは、一つの画面の中で複数人で会話が進行していく。自分が会話に参加しなくても、他の人たちの間で、話が進んでいく。誰かが会話をしていることがわかれば、好きな時に気軽にその会話に参加することができる。1対1の個人同士のやりとりだとそうはいかない。「既読」の機能によって、LINE ではメールよりは相手の状況を確認しやすく

はなったものの、自分一人の返事が期待されている以上、少なからず「返信しなくてはならない」という責任感が生まれる。話の内容にもよるが、グループチャットにおいてはそのような責任感がほとんど生まれない。しかも、LINE ではそれまでの会話のやりとりが全て保存されていき、上にスクロールしていけば今までどんな会話をしてきたのかがすぐにわかるので、それまで会話に参加していなかった人も後から参加しやすい。このように、メール以上に気軽に人とコミュニケーションをとることを可能にしたグループチャットという機能は、選択的な人間関係の形成を加速させたと考えられる。

若者の LINE 利用率が高い理由として、こぐれ (2012) は「スマホシフト」を挙げている。ガラケーからスマートフォンへのユーザーシフトが若い世代で起こっており、最初に使うコミュニケーション手段が、スマートフォンとの相性がよく使いやすい LINE であるため、若者の利用率が高いと述べている。LINE はガラケーからも利用することができるが、その大きな特徴である友だちリストをアドレス帳から作成する機能と、リアルタイムでのやりとりを可能にするチャットのサービスは、スマートフォンでこそ発揮される。この論を展開する上でこぐれ氏は、リクルート進学総研が行った「高校生価値意識調査 2012」を引用している。この調査は、2012 年 4 月現在、大学・短期大学・専門学校のいずれかへの進学を検討している全国の高校 2、3 年生約 1200 人を対象としている。この調査結果によると、2011 年から 2012 年という短い間に、ノートパソコンの所有率が伸びていることがわかり、その率は 75.4% と高い数字になっている。また、携帯電話が 8.9% マイナスになる一方で、スマートフォンが前年比 24.3% のプラスで大きな伸びを見せている。図 18 の「世帯当たりの所有率」を見ると、多くの家にパソコンがあり、スマホシフトの背景が見えてこないが、図 19 の「自分専用としての所有率」を見ると異なる側面が見えてくる。世帯では約 75% と高い所有率があったノート型パソコンも、自分専用となると 34.5% と少数派となる。デスクトップパソコンに至っては 20% を切っている。一方で、携帯電話は 11.3% マイナスと世帯全体平均よりもその落ち幅が大きくなっている。この結果から、高校生にとってパソコンは、学校以外のプライベートな時間で身近な存在であるとは言えなくなっており、その代替物として、インターネットの利用も可能なスマートフォンが身近な存在となっていることがわかる。

図 18 デジタル機器の世帯当たりの所有率

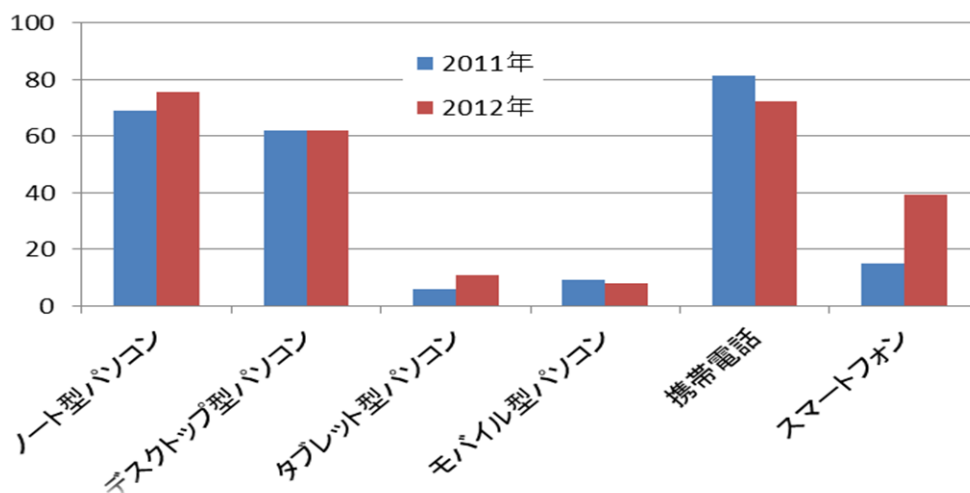
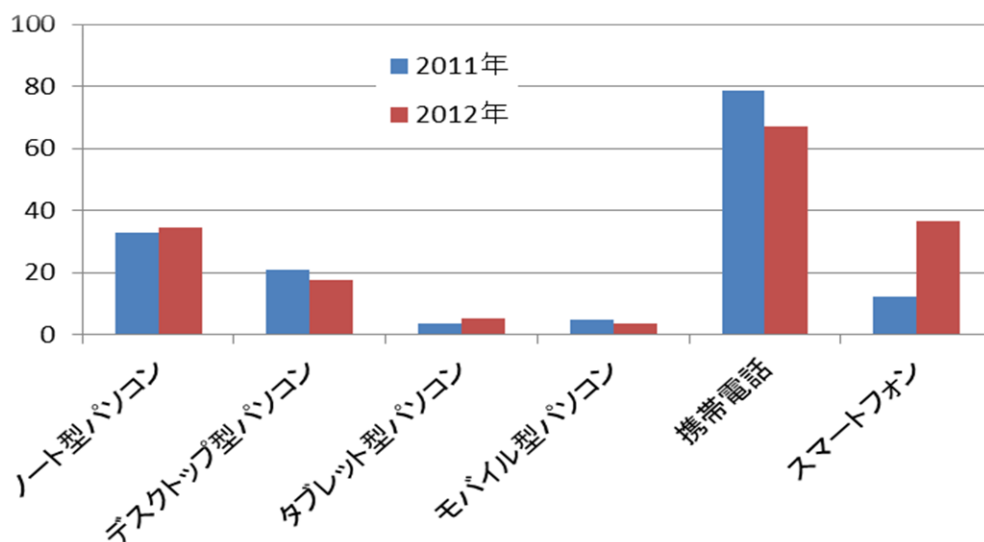


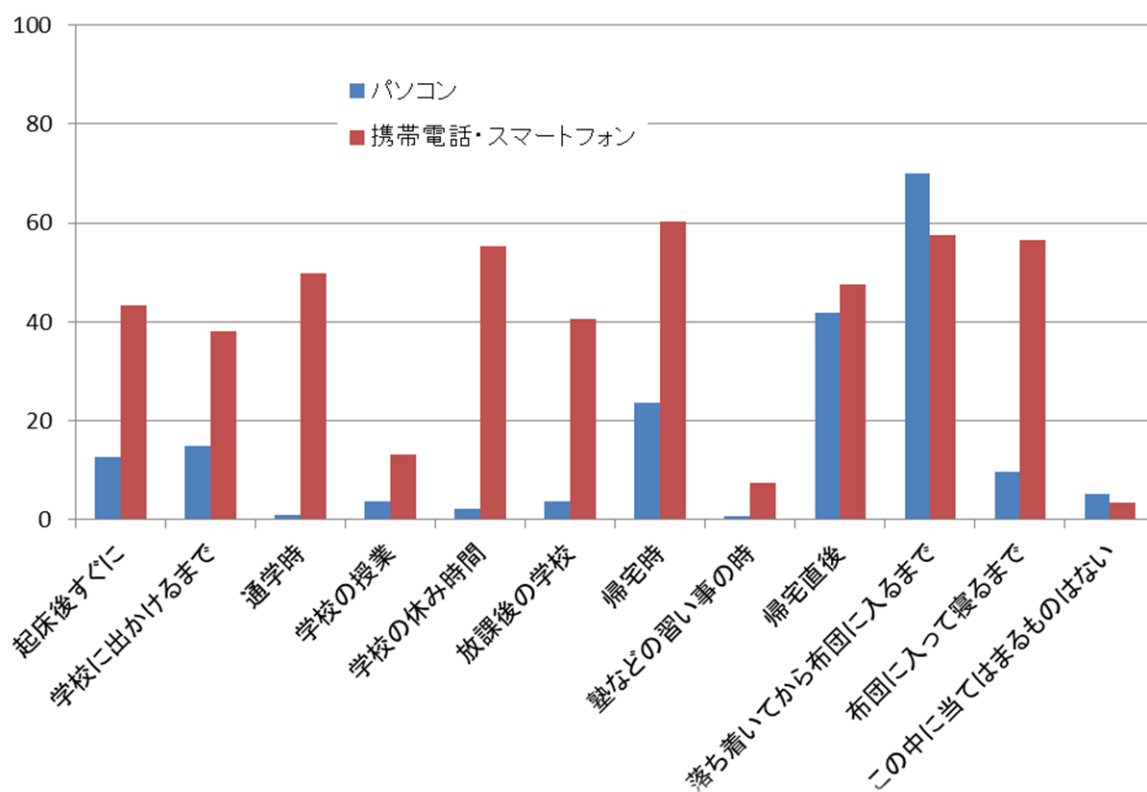
図 19 デジタル機器の自分専用としての所有率



さらに図 20 は、それぞれの機器の利用時間帯を表している。帰宅後、布団に入るまではパソコンの利用率が携帯電話・スマートフォンを上回るが、それ以外の時間帯では携帯電話・スマートフォンの利用率が高くなっていることがわかる。全世帯を対象とした別の調査では、スマートフォンの所有率は伸びているものの、全体の 2 割強にとどまっているという結果もあるが、本調査ではそれが 4 割近くにもなっている。このように、ガラケーからスマートフォン、またはパソコンからスマートフォンへのシフトが着実に

進んでおり、それを背景に LINE の若い世代のユーザーが拡大しているのであると、こぐれ氏は述べている。

図 20 パソコン、携帯電話、スマートフォンの利用時間帯



以上のように LINE の諸機能は、若者の人間関係の形成に部分的に貢献しているからこそ、若者の絶大な人気を獲得しているのだと考えられる。しかし、携帯電話が普及し、人間関係の質が変化することで様々な問題が生まれたことについて第 3 章で述べた。今度は、新たなコミュニケーションツールである LINE が広まることで、人間関係が変化し、また新たな問題が生じてくるのではないかと私は考えている。そのことを考察するために、次節では実際に LINE はどのように使われているのかを見ていく。

第 3 節 大学生に対するインタビューの分析

前節までは、LINE の利用が若者の人間関係とどのように関わっているのかを考察してきた。本節では、実際に LINE はどのように利用されているのかを、大学生に対するインタビューを参考に見ていき、LINE と若者の人間関係との関連をより深く検討していく。今回のインタビューは、宇都宮大学に在籍している大学 2 年生から 4 年生 (19

歳から 22 歳)、計 6 人を対象に行った。先述した通り、LINE は 2011 年に日本でサービスを開始した。つまり、現在の大学 3 年生がちょうど高校 3 年生の時に LINE が始まった。大学 3 年生より下の学年が、高校時代から LINE を使用できる状況にあったということである。ここでは、高校から LINE を使い始めた人と大学に入って始めた人の使い方の違いなどに注目していく。

また、インタビューの質問において、全員に共通して、調査対象の社交性を測る質問をいくつか行った。なぜなら、第 3 章で引用した岩田 (2014) の調査において、携帯電話利用と〈関係拡大志向〉の項目の間には正の関連が見られたからである。〈関係拡大志向〉の強い人は、「今よりも友人の輪を広げたい」と考えており、人間関係の形成に積極的な考えをもっている。つまり、社交的な人ほど LINE を使って頻繁に友人と連絡をとっており、逆に社交的ではない人は必要最低限の用件でしか LINE を使わないことが考えられる。社交性に関する質問は以下の 8 つである。

「部活やサークルに所属していますか」

「あまり親しくない人にも自分から挨拶をしますか」

「顔見知りではあるが、今まで話したことのない人に自分から話しかけたことはありますか」

「普段知らない人に話しかけたことはありますか」

「人と仲良くなるのに時間がかかるか」

「LINE の友だちリストに何人登録されていますか」

「LINE の中で自分が入っているグループはいくつありますか」

「一日平均どのくらい LINE でメッセージを送信しますか」

これらの社交性に関する質問に対する回答も一部含めて、対象の属性を表にまとめると以下ようになる。

表 1 インタビュー対象者の属性

	性別	学年	友だち登録数	グループの数	LINE の開始時期	一日の平均 LINE 送信数
KK さん	男性	4 年	342 人	約 10	大学 2 年の夏	約 50 回
S さん	男性	4 年	45 人	約 10	大学 2 年の冬	1~2 回
T さん	女性	4 年	288 人	44	大学 2 年の夏	20~30 回
IS さん	女性	2 年	323 人	55	高校 3 年生	約 50 回
IE さん	男性	3 年	221 人	27	大学 1 年の夏	約 20~30
KA さん	女性	3 年	401 人	82	高校 3 年の春	80~90 回

このように、調査対象の属性と LINE の使い方の関連に注目しながら、実際に LINE はどのように使われているのかを分析していく。

3-1 KK さんへのインタビュー

まずは、現在大学 4 年生 (23 歳) の K さんへのインタビューを見ていく。K さんは、大学で 4 年間硬式野球部に所属しており、ほぼ毎日チームメイトと練習で顔を合わせていた。初めて会う人にも自分から話しかけることができ、野球部以外にも大学での交友関係は広い。また、部活以外では旅行などの企画を率先して行ったりするなど、リーダーシップを発揮する場面も見られる。しかし、友人関係に関して本人は、「周りからは仲が良さそうに見える関係でも、相手に多少気を遣っている時が多いので、浅くて広い友達が多い」と話した。挨拶に関しては、部活を長く続けているということもあり、挨拶は基本的なことであると考えており、あまり親しくない人に対しても自分から挨拶をしに行くということだった。とても責任感が強く、それゆえに友人関係に関して冷静な面をもっている人である。

始めに注目したのは、K さんが LINE を使ってどのようなやりとりをするのかについて話した部分である。

— 1 対 1 の個人のやりとり (以下個人 LINE) とグループの中でのやりとりではどっちが多いですか？

「基本的にはグループでやりとりをしてしまいます。個人でやる場合には、『飯食べに行こう』といった事務連絡のような、必要最低限の内容を送るようにしてます。」

— 個人 LINE では事務的な連絡をすると言いましたが、グループの時には事務的なやりとり以外にも他愛もない会話をするということですか？

「グループにもよるけど、予定を決めているときに余計なやりとりはしないけれども、会話の流れを読んで、何か反応してほしいようなことを言ってきた人がいたら、(その人を) からかったりするようなことはあります。」

— ではグループの会話の中に積極的に入って行くことが多いということですか？

「様子を見てですが、他の人たちが何も反応がなくその人が困っているときに、すぐに反応するようにしています。」

— 困っている人がいるとは例えばどんな状況ですか？

「何か旅行の予定を立てているときに、誰も何も反応していない状況で、幹事の人困っている時に、幹事の人気持ちを考えて、こう言ってくれたら嬉しいなということ

を、早めに言って周りの反応を促すようにしています。その場の会話を盛り上げるようにしています。」

——**逆に会話に入っていないことはありますか？**

「面倒だったり、自分の出る幕じゃないなと思ったときは、あえて入らないことがあります。(例えば、)すでに話が盛り上がっている時や、自分の関係ない話をしているときなどは入っていきません。」

この内容からは、KさんはLINEを使って友人と選択的なやりとりを行っていることがわかる。しかもKさんの場合は、他の人の気持ちを考慮し、その時々合った対応を考えてするようにしているので、状況志向的な＜柔軟な関係＞を築こうとしていると考えられる。本人が話していた、「常に相手に気を遣うような性格」が状況志向的なLINEの使用の仕方につながっているのだろう。普段、必要最低限の事務連絡しかしないことも、自分がグループの会話に入るべきか、入らないべきかの判断に関わっていると考えられる。

続いてLINEを使い始めての実感について尋ねた。

——**LINEを使い始めたときの实感を教えてください。**

「やっぱり便利ですね。(言いたいことを)伝えやすいし。なぜかという、今はスタンプというものがあって簡単にやりとりができるからです。その上、一気にグループで(多くの人と)やりとりができます。メールの場合は一斉送信というやり方だったのですが、LINEではグループを作りやすくなったといいますか、『既読』という機能によってメッセージを見てるか見てないかということがはっきりするので、幹事をやる立場としてはとても(連絡が)やりやすくなりました。メールでは誰が見て誰が見てないのかわからなかったの。」

——**スタンプの話が出てきましたが、やりとりをしていてスタンプや、顔文字・絵文字が何も使われなかったら、「冷たい」と感じることはありますか？**

「普段(スタンプなどを)使っている人が使っていないと、冷たく感じるよね。何にも(絵文字や顔文字も)なく『はい』とかだと、怒ってるのかな?って(思います)。」

——**では、絵文字や顔文字、スタンプなどから相手の感情を読み取ることはありますか？**

「ええ～……、スタンプからは(感情が)わかるよね。例えば、同じ『ありがとう』でも使ってきたスタンプによって、土下座しているスタンプだったら本当に感謝しているんだなって思うし、何かポーズをとっているスタンプだったら機嫌がいいだけなんだなって思いますね。あんまり気にしないけどね。ただ、スタンプがあるとちょっと嬉しいかな。ないよりは。」

—Kさん自身はどんな風にスタンプを使っていますか？

「長く（メッセージを）打つ時は使わなかったり、なんか（メッセージだけじゃ）さみしいなって時に使うかな。付属として。あ、これだと冷たいなって思ったときに使うかも。あまりスタンプに意味を持たせては使っていないかな。でもスタンプだけで返信するのは失礼だと思っているから。」

—今ではメッセージ付きのスタンプも出てきているけど、それだけで返信するのは失礼だってこと？

「別に友だちだったらいいけどね。目上の人に対しては（失礼だと思う）。例えば、相手が文章、スタンプって（続けて）きたとすると、俺も文章、スタンプで返すようにする。だから、相手に俺は合わせる。もちろん、スタンプで返してきたらスタンプで返す。」

—なるほど。あとは「既読」の機能の話がありましたが、Kさんにとって「既読」機能は便利なものであるということでしょうか？今では、メッセージを読んだのに返信をしない「既読無視」というのが問題になっていますが。

「自分にとっては便利ですね。『既読』がついてなかったら読んでないんだろうなと（思う）。読む気がないんだろうなと（思う）。『既読』がついたのに返ってこなかったら、その人が今は自分と連絡を取りたくないんだなって思うくらいかな。」

—では逆にLINEを使っていて面倒だなって感じることはありますか？

「それはありませんね。」

この話では、KさんにとってLINEは便利なものでしかないということだった。彼にとって便利な機能の一つがスタンプである。スタンプは絵文字や顔文字と同様、文字によるコミュニケーションにおいて、感情を伝える手段として使うものだと考えており、Kさんもその点に関しては賛成している。しかし、実際に使う際には、感情を伝えるというよりは、文章の少なさを補う付属品として使っている。この使い方は意外であったが、ここでも「冷たい」と相手に感じられないようにと、相手の気持ちを配慮している。もう一つ挙げた「既読」機能に関しては、相手がメッセージを確認したかしていないかがはっきりするため、何かを取り仕切ることが多く、相手の気持ちや状況を重んじて友だちとつきあっているKさんにとってはとても便利な機能であるということだった。私がLINEの機能で問題視していた「既読無視」の人間関係に与える悪影響に関しては、彼には当てはまらなかった。

最後にLINEを使っていて友人関係が広がったエピソードを聞くことができた。

—LINEを使っていて普段連絡をとってなかった人と連絡をとるようになったことはありますか？

「そうですね。同窓会などで、みんなで写真を撮ろうってなるじゃないですか。その写真をみんなに送る時にグループを作るんですよ。そうしたときに、グループの中にそ

れまで連絡先を知らなかった人がいるわけですよ。そして、そのグループの中で話しているうちに、『久しぶりだったね〜』『今度ご飯行こうね』と個人ラインをするようになったことはあります。」

この場合は、同窓会というものがきっかけとなっただけではあるが、グループチャットという機能があり、全員で話をしたり写真を共有したりしやすくなったことで、久しぶりに再会した人とでも、連絡が取りやすくなったと考えられる。LINE はメールと異なり、一つの画面の中でやりとりがされていく。同じ画面を共有していることで、気軽にその先の関係も築きやすいのであろう。

3-2 S さんへのインタビュー

続いて、大学4年生（22歳）のSさんへのインタビューを見ていく。Sさんは、大学で部活にもサークルにも所属しておらず、友だちとLINE でやりとりすることも一日に平均1~2回であり、大学での交友関係はそこまで広いというわけではない。知らない人に自分から話しかけることはできるが、心の中でどこか遠慮してしまうらしく、友だちになるまでにはかなり時間がかかると話していた。彼は実家暮らしであり、あまり大学にいる時間が少ないというのも関係しているのかもしれない。また彼は、Twitter に書き込む回数が多く、誰かとやりとりをしようと自分から思うというよりは、ツイートに対する返信が誰かから来たら、やりとりが始まることが多いということだった。

始めに、LINE の便利な面について質問した時の話に注目する。

— LINE を使いはじめて一番便利だと思ったことは何ですか？

「メールだとなんか長く（文章を）書きちゃうんだよね。LINE だと一言二言で言えちゃうから楽ですね。例えば、友だちが冗談を言ってきたときも、一言返すためだけにメールを使うのも変な感じがするんだよね。逆にメールを使うときはなるべく必要な情報を詰め込むようにしてます。だから連絡をとる回数は確実に増えましたね。」

この話からは、連絡手段がLINE になったことで、より気軽にやりとりができるようになったことがわかる。彼の中では、メールで送信する場合にはある程度の文量を必要とする。おそらくメールの場合、ある程度広いスペースが用意されており、その広い枠に少ない文量を打つには違和感を覚えるのだろう。LINE の場合、文量に合わせて枠が作られるので、どんなに短い文章でも気軽に送ることができる。つまりメール以上に、顔をあわせて会話するときと同じような感覚で、やりとりをすることができるようになったのである。

次に、LINE によるコミュニケーションの問題点につながる話を聞くことができた。

ここでは LINE ではどのような内容のやりとりが多いのかを尋ねた場面である。

— LINE では事務的な連絡以外のやりとりはしないんですか？

「しないですね。そういうのは基本 Twitter でやりますね。LINE ではやりません。」

— Twitter でやるとはどういうことですか？

「自分が何か他愛もないことをつぶやいたとしますよね。それに対して誰かから返信があったらそこからちょっとしたやりとりが始まるわけです。LINE だと必ず相手がいるわけで、そんな他愛もない話をしようとしたら迷惑じゃないですか。Twitter は誰かとやりとりをしたくてやっているわけじゃなくて、ただの独り言だからいいですよ。逆に誰かからそんなどうでもいいような話が LINE で来たらイラッとしますね。」

— グループでもしないんですか？例えば、グループの中で他愛もないやりとりがされたらその中に入っていきたくないんですか？

「絶対ない。むしろそのラインの中に『そういうのは個人ラインでやれ。迷惑だからグループでやらないでくれ』って言って話を止めますね。基本自分は、そういう話は大学にいる間にすればいいだろって考えなんで。」

— じゃあそういうどうでもいいような話には全く関与しないってことですね？

「一応全部内容は確認しますがね。だってその中に重要な内容が入ってるかもしれないじゃないですか。そこが一番面倒なんですよね。何十件もたまってるメッセージを読むのが。だから、グループでやる時は重要な連絡事項だけにしてくれ、雑談は勘弁してくれと思うわけですよ。」

ここではグループチャットの機能のデメリットを聞くことができた。グループチャットは一度に何人もの人とやりとりができてとても便利な機能である。しかし、そのグループ一度参加してしまうと、そこから抜けにくくなってしまう。グループの中には、人間関係に対する考え方が違う人がいる可能性がある。気の合う人とのみグループを作り、やりとりができればいいのだが、大学で生活していくうえでは参加せざるを得ないグループが必ずある。特に、事務的な内容を重視する彼にとっては、自分と全く関係ない話をしていたら、うるさいと感じてしまうのは当然であろう。しかし、いつ自分に関係のある話や重要な連絡が出てくるかわからないため、必ず確認しなくてはならない。また、そのグループの関係を保つために何かしらの反応を示さなくてはならないと思い、相手に気を遣い、表面的なやりとりになってしまう可能性も考えられる。グループチャットはとても便利なものであるが、使い方によっては表層的で「浅い」関係の形成を助長してしまう恐れもあるのである。

3-3 Tさんへのインタビュー

次は大学4年生（22歳）のTさんへのインタビューである。Tさんは大学で部活にもサークルにも所属してはいないが、知らない人と友だちになるのはあまり時間がかからないと話す。短期バイト先でも他大学の人に、「どこ大学ですか？」「緊張しますね」などと自ら積極的に話しかけるといふ。彼女は昔、転校することが多く、知らない人がたくさんいる環境になじんでいかなければならないことが人より多かったこともあり、友人関係を築くのはとても早いのだと考えられる。実家は青森にあり、長期の休みには帰省し地元の友人と会うことも多く、とても地元愛の強い人である。

まずは、LINEでどういったやりとりをするのかを尋ねた。

— LINEではどういう内容のやりとりをすることが多いですか？

「事務連絡が多いかな。でも、仲の良い人とは、女の子なんかとはほんとに内容のないラインをしたりする。何時間も。」

— やっぱりそういう他愛もない話をするのは好きなの？

「好きだね～。眠くなかったら。自分もヒマで相手もヒマだってわかってたら、(そういう話するのは)楽しいかなって思う。相手は限られるけどね。」

— てことは、家でLINEを使うことは多いのかな？

「そういうラインは家でしかしないかな。そうでなくても、LINEを使うのは基本家が多いかな。会えない時だからこそLINE使って連絡を取るみたい。私たち、ギリギリになって明日の予定立てたりするからさ。その流れでおしゃべりが始まっちゃうんだよね。しかも、大学で会って予定立てようとしても、全員集まることってなかなか難しいじゃん。LINEだと、後で見返すことができるから便利なんだよね。」

— なるほどね。他に便利だと思うことはありますか？

「早さかな。ポンポンポンってテンポよくやりとりができるところがいいかな。あとは、話した内容を全部とっておけることかな。何か相手から嬉しいこと言われたらそれをあとで見返したいときがあるのね。幸せな気持ちにもう一度浸りたいというか。」

彼女の場合、事務的な連絡以外に、友だちと他愛もない話をLINEですることを好んでいる。彼女にとって、短文で短時間の間に多くのやりとりが可能なLINEは、友だちとコミュニケーションをとるうえでとても便利なものとなっている。メールの場合、自分がメッセージを送ってから返信が来るまでに多少のタイムラグがあるため、多くの会話を楽しむことはできない。メールの時と比べて友だちと連絡を取り合う回数が増えたという実感にもうなずくことができる。また、会話の内容が全て保存されるというのもLINEの特徴の一つである。メールの場合は、ある一定の容量を超えたら古いものから順に自動的に削除されていった。保護メールという保存しておきたいメールを選ぶ機能もあったが、保存できる容量には限界があった。LINEの場合、やりとりがそのまま保

存されているため、あとでどんな会話をしたのかを見返すことができる。そのため、相手とやりとりをしている最中に話のズレが生じたり、同じことを繰り返して話してしまうということが起こりにくく、より円滑なコミュニケーションが図られると考えられる。

続いて LINE の面倒な機能について尋ねた部分に注目した。

—LINE を使っていて面倒なことはありますか？

『既読』かな。」

—やっぱり気になりますか。

「気にするというか、相手に気にされるのが嫌かな。一回（友だちに）言われたことがあるんだよね。『既読無視かよ〜』って。自分は後で返事しようと思っていたのに、そういうこと言われて、『あ、ごめん』みたいな。冗談っぽくだけどね。でも少し気になったことはあるかな。」

—じゃあ自分あんまり気にしないってこと？送ったメッセージに「既読」がついてるのにしばらく返信が来ないときとか。

「内容によるかな。早く返事がほしいときとか（気になるかな）。それこそ明日の予定決めてるときとかに、『既読』がついたのに返ってこなかったら、ちょっと不安になりますね。そもそも明日じゃないんだっけ？みたいな。あとは逆に、『既読』がしばらくつかないときも不安になることもありますね。無事家についてのかな、なにかあったのかなって心配になったこともありますね。」

彼女は、LINE の「既読」機能に関して少し面倒だと感じている。自分は無視するつもりはなくても、一度「既読」をつけてしばらく放置しておく、相手によっては「自分が無視された」と感じてしまう可能性がある。自分が早く返事がほしい内容だと思っても、相手がそこまで急ぐ内容ではないと感じる場合もある。このように、話の内容に対する感じ方が異なってしまうと、「既読」がつくことにとっても敏感になる。T さんが話してくれたように、友だちが「既読」をつけてしばらく返信しなかったことに対して指摘してくれればいいのだが、お互いが疑問を感じたままやりとりが続いていってしまうことも考えられる。それが最悪の場合、相手に対する不信感に変わってしまい、現実の人間関係にもひびが入ってしまう可能性もある。「既読」機能は、相手の状況がわかりやすく、連絡を取るうえでとても便利な面もあるが、お互いの考えがズレてしまうと不信感を抱かせてしまうものになってしまうのである。

3-4 IS さんへのインタビュー

続いて大学 2 年生（20 歳）の I さんへのインタビューを見ていく。I さんは小学 4 年生からバレーを続けており、大学でもバレー部に所属している。サークルに対する興味

はあったらしいが、大学に推薦で入学してきたということもあり、現在はどのサークルにも所属していない。ずっと部活を続けていることもあり、あいさつは習慣づいている。近所の人などには積極的に自分からあいさつをするということだった。しかし、初対面の人に対しては、自分から話しかけにはいかないと話していたので、友人づきあいに関しては消極的な面もある。彼女は群馬出身なのだが、今でも高校の友だちと連絡を取ることが多い。自分から連絡をすることは少ないのだが、友だちから連絡が来て遊ぶ約束をして帰省することが今でもよくあるらしい。高校、大学も含めて、交友関係はとても広いと言える人である。

彼女が LINE を始めたのは高校 3 年生の時に、スマートフォンではなくガラケーで始めた。そこでスマートフォンで利用する LINE と、ガラケーで利用する LINE の違いをどのように感じたかを尋ねた。

—高校の時にガラケーで LINE を始めたって言ってたけど、その時もけっこう LINE を使ってたんですか？

「うーん、ほとんどメールだったけど、相手がスマホや iPhone だったら (LINE を) してたかも。でも使ってたけど、相手はスマホだから向こうには『既読』がつくんだけど、自分はガラケーだったから (『既読』が) つかないの。っていうのを後から知ったんだけど、そういう違いはあったかな。」

—じゃあ、友だちとの連絡はほとんどがメールだったわけですね？

「ほとんどメール。ガラケーを使ってた時期が人より長くて、大学に入るときに (スマホに) 変えたから、そこまではずっとメールは使ってたかな。」

—大学でスマホに変えて、そこから LINE を使う回数が増えたのかな？

「スマホに変えてから全部 LINE かな。一時期ずっとメールを使ってたってのもあるけど。ある友だちがすごくメールで連絡を取りたい人だったのね。もちろんラインもするんだけど。だから (メールと LINE) 両方を使ってたんだけど、そういうのでメールも少しは使ってたかな。長文で送るときはメールで、とっさの連絡の時は LINE でみたいな使い方をしてた。でもそれぐらいかな。」

—LINE を使うのはガラケーよりスマホのほうがやっぱり便利？

「うーん、今は使い慣れてるから確かにスマホのほうが便利だと思うけど、スマホに変えたときは、そこまで便利だとは感じなかったかな。LINE というより、ボタンで文字を打つほうが好きだったから、あまりスマホに憧れはなくて、むしろガラケーのほうがよかったって思ってたかな。」

—なるほど。さっきガラケーの時は「既読」がつかなかったって言ってたけど、スマホにして「既読」が自分のほうにもつくようになってどう思いましたか？

「実際、メッセージの通知を受けたときに、画面に文章が出るからそこで『既読』をつけなくても読めちゃうんだよね。『未読』みたいな。そういう風に、読んでるけど知

らんぷりする人周りにもいるから、そういう意味では『既読』の機能はあったほうがいいんじゃないかな。自分は『既読無視』されるよりも、読んでるけど読んでないふりされる『未読無視』されるほうが嫌なんだよね。だからどちらかという、『既読』がついてしばらく返信が来ないより、しばらく『既読』がつかないほうが嫌というか不安かな。だから自分は『未読無視』みたいなことは絶対しないようにしてる。『既読無視』はけっこうするけど。」

LINE をガラケーで利用する時の、スマホで利用する時との違いとしては、一つは「既読」機能がないことである。彼女の場合、この「既読」機能に関してはあまり気にすることはないと話していた。それよりも、「未読無視」をされるほうが嫌だという。スマホは LINE のメッセージを受け取った時、画面にその文章を表示する。その文章をスクロールするとほとんどの内容が読めてしまうのである。その機能を利用して、「既読」をつけることなく、文章を読むことを「未読」と言っている。これをする人は、「既読」をつけてしまうと相手に不快な気持ちを与えてしまうという気持ちが働いていると考えられる。時には、あまり連絡を取りたくない相手にも、その気持ちを相手に察せられずに連絡を取る相手を選択することが可能になる。この機能を利用することで、お互いの関係に対する良し悪しがずれてきて、関係がより表面的になってしまう恐れがあるのである。

次に、LINE ではどのような内容のやりとりをするのかを尋ねた。

—LINE で事務的な連絡以外に中身の無い話をしたりはしますか？

「するときは全然ありますよ。でも、中身の無い話をするのは、決まった人というか、くだらないことでも会話できる人としかさないです。自分の中ではそういうくだらない話をできない人は、そこまで深い関係じゃないのかなって思うから。別に意識的にそういう風に相手を選んでるわけじゃないんだけど、後々内容を見返すと（特定の人としかくだらない話をしてないってことが）わかる。」

—高校の時もメールで他愛もないやりとりをしてたりした？

「うん、あったね。でもメールだと送信に時間がかかるんだよ。それが不便だった。LINE って本当に早いじゃん。自分が送信しようとしている最中に相手から一方的に（メッセージが）来る時もあるけど、それはそれで面白かったりするしね。話が盛り上がるのはメールに比べたら LINE だと思う。」

—それは個人ラインが多いの？

「いや、個人（ライン）でもグループでもやるかな。でもやっぱりそういうやりとりをするグループも限られるかな。くだらない話をできる人たちには絵文字すら使わなかったりとか。めんどくさいんだよね。もう自分は絵文字を使わない人って周りから思われてるから楽だけど、絵文字を使わないと『怒ってるのかな？』って思う人いるじゃん。」

自分もときどき思うことあるんだけどね。」

—**やっぱり絵文字や顔文字、今ではスタンプで相手の感情を気にすることある？**

「あると思う。いつも（スタンプとか）あるのにないとちょっと焦る。あと（笑）とかついてると安心する。」

ガラケーで LINE を使う時はスマホで使う時ほどのテンポの速いやりとりはできない。彼女は今でも高校の友人と連絡をとることがあり、高校時代にガラケーで連絡していた時と比べてとても便利だと感じている。また彼女は話の内容や、絵文字などの使用を、無意識にだが、友だちによって使い分けている。LINE では好きな人と好きな人数でいくつものグループを作ることができるので、このグループでは楽しい話、あのグループでは真面目な話というように、より話の内容で相手を選択することが容易である。このことによって、グループの中で誰かのために話を遠慮することが少なくなる。つまり、相手に気を遣うことなく話したいことを素直に話すことができるようになったのではないかと考えられる。

3-5 IE さんへのインタビュー

続いて大学3年生（21歳）へのインタビューを見ていく。IEさんは大学で準硬式野球部と、ほとんど活動に参加していないが、ソフトボール同好会に所属している。準硬式野球部では部長を務めており、小・中・高でも野球部でキャプテンをやっていた経験がある。また、学科の幹事も任されており、とてもリーダー性がある人である。社交性に関しては、知らない人に自分から話しかけることは少ないが、代わりに例えば、清掃員のおじさんやバイト先でのお客さんに話しかけられることが多いと話す。本人は自分のことを人見知りであると言い、友だちと関係を築くのは遅いということだった。LINEで連絡をとる相手は大学の友だちが多く、高校の友だちとはあまり連絡をとることはなく、帰省もほとんどしないと話していた。

まずは、LINEで行うやりとりの内容について話した。

—**自分からラインを送ることは多いですか？**

「あんまりないですね。自分今（部活で）キャプテンやってるじゃないですか。その（部活に関する）連絡ぐらいですかね、自分から送ることは。」

—**じゃあ、あまり他愛もないやりとりはしないってことかな？**

「ときたまですね。ほんとはごくまれにするぐらいですね。」

—**それは個人ラインで？それともグループで？**

「グループですね。個人では（他愛もないやりとりは）ほとんどやらないですね。あとは、朝1コマの授業の時に、大学に来てない友だちにラインを送って起こしたりはし

ますね。今日も1コマテストだったんですけど、8時に1回全員で連絡をとりあって起きてるか確認しようってなりましたね。今日は全員起きてたんですけど、誰か『既読』がつかなかったら起こしに行ったりしますね。」

—そういう事務連絡が多いということは、家に帰ってもLINEで友だちとやりとりすることはあまりないのかな？

「あー、ないですね。基本連絡とかしかしないですね。『明日何時集合！』『明日どこ集合！』『明日なにになにしよー！』ぐらいですね。自分は連絡事項以外に長文を打ったりしないですもん。」

—なるほど。LINEでは主に事務的な連絡をすることが多いということですね。

では続いての質問なのですが、大学1年生の時にスマホに変えてLINEを使い始めたわけですが、一番便利だと感じたことは何ですか？

「便利なのは、すぐ（メッセージの）受け答えができることですかね。1分以内の世界でポンポンポンって（やりとりが）できるじゃないですか。メールは一回送信して（相手が）受信して、返信が来るじゃないですか。あとはグループを作って一度に（何人ともやりとりができる場所ですね）。それが一番大きいですね。自分が（高校の時）キャプテンだったときは、5人ずつにしかメッセージを送れなかったんで、何回もメッセージを作らないといけなかったんで。」

IEさんはKさんと同様に、グループチャットを多用し、テンポの速いやりとりができる点が便利だと感じている。やはり、部活のキャプテンや幹事などを務める人にとっては、一度に大勢の人に連絡を送ることができ、相手の反応が早くわかりやすいLINEの機能を便利だと感じる傾向にある。またIEさんの場合は、学科の友だちと連絡を取り合って、授業に遅刻しないようにお互い助け合うことにLINEを使っている。彼へのインタビューから、事務的な連絡や他愛もない話をする以外にも、友人との関係を築くLINEの使い方があることがわかった。これは、LINEを使うことによって、そのグループ内のつながりを強くし、そしてその関係を維持している事例であると言える。

次に、LINEの「既読」機能に関して尋ねた。

—LINEの「既読」の機能は便利ですか？それとも嫌ですか？

「そうですね。（自分が）連絡をするときは便利ですね。『既読』がつけば誰が何人（メッセージを）見たかわかるじゃないですか。野球部のラインだと（参加人数が）30人いるんで、『既読』が29ついたら全員見てるんだなって。それで別に『わかりました』って返信が来なくても、ちゃんと伝わってるんだなってわかるから便利ですね。プライベートではあんまり（便利ではない）。1対1だと特に相手のメッセージを自分が今見たんだなって相手にわかるじゃないですか。自分はすぐに返信しないことがあるんですよ。忙しいから後で返そうって。そうすると、『なんで既読無視してんの？』って来る

んですよ。」

—じゃあ、自分が「既読」をつけるときに相手のことけっこう気にするってことかな？

「気にしますね。それこそ自分がけっこう『既読無視』されるんで。グループでの連絡は基本『既読無視』なんで。」

「既読」をつけてからしばらく返信をしなかったことで、相手から文句を言われてしまったことはTさんも経験していた。Tさんの場合はその時の一回のみであったが、IEさんはそのようなことが何回もあったという。LINEはメール以上に相手に気軽にメッセージを送ることができる。忙しかったり面倒だったりした時は、すぐに返信をしなくても許されることも多くなった。しかしIEさんのように、相手が「既読」に関して気にする人の場合、自らも「既読」に対して神経質になる。やはりこの「既読」機能に関しては、相手や状況、それまで築いてきた相手との関係によって、便利か不便かが変わってくるのだと考えられる。

3-6 KAさんへのインタビュー

最後に、大学3年生（21歳）のKAさんへのインタビューを分析していく。彼女は小学2年の時からバレーを続けており、大学でもバレー部に所属していて今年から部長を務めている。サークルには所属していないが、友だちの幅を広げるためにバレー以外のサークルに入ってみたかったと興味を示しており、交友関係を広げたいという意欲がとても強いことがうかがえた。また、彼女はとても社交性にあふれている人である。近所の人に対しては自分から挨拶をし、バイト先ではお客さんに対して積極的に声をかける。初対面の人に対してもあまり気兼ねせずに話しかけるということだった。地元が栃木県であることもあり、今でも高校の友だちと連絡をとることが多く、頻繁に会ってご飯を食べに行ったり高校の部活の後輩を応援しに行ったりするらしく、交友関係もとても広い。友だちだけではなく、家族や親戚ともグループを作ってやりとりをし、話が盛り上がるということだった。友だちだけでなく大人の人も含めて、人との交流をととても好む人である。

まず始めに、現在LINEをどのように使っているのかを尋ねた。

—LINEではどのような内容のやりとりが多いですか？事務的な連絡か中身のないような他愛もない話か。

「わたし中身のないような話はあるまじない。そういうのめんどくさいから。予定のある話しかしないかな。」

—事務的な内容で頻繁にやりとりしてるってこと？

「うーん、そうかな。でもわたし携帯ないとたぶん生きていけない。LINEないと生

きていけないと思う。」

— **予定が多いというか、けっこう忙しいってことかな？**

「うん、忙しい。『今日バイト代わってー！』とか、『今日の部活何時からに変更ねー！』とか。」

— **じゃあ、ほんとに LINE でおしゃべりみたいなことはしないんだ。**

「うーん、まあ（話が）盛り上がることはあるけど、基本しない。（そういう話を）するときは、めんどくさいから変換とかもしないで一気に打ち込んで送信！みたいな。スタンプ送信！みたいな。で、盛り上がってくると『じゃあ、今度会おうよ』ってなつて、予定立てることになるのね。だから会ってしゃべるほうが好きかな。」

— **さっきけっこうスタンプも送信するって言ってたけど、どういう時に使うの？**

「『了解』『おっけー！』『えっ？』みたいなことを、スタンプで送っちゃう。あとはすごくテンションが上がった時。早く返事がほしいときに、スタンプを連打して振動で（メッセージに）気づかせることもある。」

— **相手に自分の感情を伝えるためにスタンプを使うことってある？**

「あんまりないかな。基本先輩とか教授とかにはスタンプ使わなくて、友だちとのやりとりでしか使わないから、使うスタンプは決まってるから使い分けることはしないかも。」

— **逆に、相手のスタンプから相手の感情を読み取ることってある？**

「うーん、スタンプというよりは、絵文字とかがないと『あれあれ？今日はおとなしいな』とか思う。ある友だちはさ、ほんと短文で、めんどくさいときは変換とかもしないで『りょー』『よろ』『おっけ』とか。もうちょっと感情を伝えてくれてもいいのかなって思う。」

— **なるほど。じゃあ、感情を伝える手段としてスタンプは使ってないってことね？**

「うん。なんか絵文字みたいな感じ。もともと高校のときとかも絵文字すごく使ってたからね。絶対文章に何もつけずに文章を終わらすことはなかったから、時間に余裕があるときには文章にプラスで絵文字をピッ！みたいな。」

彼女は友だちと予定を立てるために LINE を使うことが多い。そのような事務的な連絡以外にも他愛もないような話をすることもあるが、話が盛り上がってきたところで、会って話そうということになり会う予定を決めるやりとりになるという。私はこの研究を始める前は、携帯電話が普及してきたことで、家にいるときでも友だちとコミュニケーションをとることが可能になったため、それまでのように直接友だちと会って遊ぶ機会が減ったのではないかと考えていた。そして LINE が広まり、メールより手間なく相手とやりとりすることができるようになったことで、対面する機会の減少が加速したことも十分考えられた。しかし彼女の話を知ると、LINE を使い始めたことで友だちと会う機会が増えているように感じる。LINE のテンポの速いやりとりが可能な機能で、友

だちと連絡をとり、予定を立てやすくなったことで、直接会って対話をする機会が増えたのだと考えられる。友だちと会う機会も増えており、それ以外の時間でも次の予定を立てるなどやりとりが続くのであれば、単純に友だちとつながっている時間が長くなっているため、LINEは友人関係の濃密化を一層強めたのだと考えられる。

また、LINEの特徴的な機能であるスタンプは、KKさんと同様にあまり自分の感情を相手に伝える手段としては使っていない。ガラケー時代の絵文字の延長として、文章を装飾する効果として使っている。自分がそのように使っているからこそ、相手からスタンプや絵文字がない文章が送られてきたら少しさみしく感じるのであろう。

続いて、高校の時の携帯利用について話を聞いた。彼女は高校3年生の春にガラケーからスマホに変え、携帯ショップの店員に勧められLINEを使い始めた。

— それまで使っていたメールと比べて、LINEを使い始めたときの実感としてはどんなふうに思った？やっぱり便利だった？

「うん。でもメールの時は、『早く返信来ないかな〜』っていう、携帯を開いた時のドキドキ感があったから、それが楽しかったのね。『返事来ないな〜、読んだかな〜。』みたいな。高校の時の彼氏とのやりとりは、それまではメールでだったから、『まだかなまだかな』って、センターに問い合わせとかもしてた。」

— その時は、彼氏とはおしゃべりの感覚でメールでやりとりをしていたの？

「うん、してた。付き合う前から同じクラスで、かなり仲良くしゃべってたからその延長でメールでもやってた。で、お互いがスマホに変えてLINEを使い始めてからは、LINEでやりとりするようになった。」

— LINEは「既読」の機能があるから、おそらくメールの時のようなドキドキ感はなくなったと思うんだけど、その頃は「既読」に関してはけっこう神経質だったのかな？

「うん、確かにそうかも。『既読』ついたけど（返信が来ないと）何やってんの？みたいな。」

— やっぱり「既読」がついたのに返事が来ないのは嫌だった？

「うん。お互いにスタンプ一個でも返してってなった。まあでも、お互い部活やってたから、そこまで頻繁にやりとりしてたわけじゃないけどね。」

— その「既読」に対する感覚は今もあるの？

「いや、今はそこまで神経質じゃないよ。むしろ、安否確認じゃないけど、相手が（メッセージを）読んだことがわかるから便利かも。」

— なるほど。LINEを使い始めてからメールは使わなくなった？

「いや、まだガラケーの友だちがけっこういたから、その人たちとメール使ってやりとりしてた。あと母親とか。母親がスマホにしたのは、わたしが高校を卒業するときぐらいだから、それまではメールで連絡とってた。」

—今はまだメールは使ってる？

「え、あんまり使わない。メルマガ（＝メールマガジン、広告のようなもの）がひたすら来て、それをゴミ箱に捨てるくらい。その中から就活に関係ありそうなやつだけ開いて読んでみたいな。」

彼女は高校の時から LINE を使っていたわけだが、高校の時と現在とでは、LINE の使い方や LINE に対する感覚が変わってきている。高校の時は、彼氏も含めて友人と他愛もない会話をメールや LINE で楽しんでいて、「既読」に対しても神経質であった。しかし大学に入った今では、LINE でやりとりする内容は事務的な連絡が多く、「既読」の機能に対してそこまで気にせず、むしろ便利だと感じている。高校の時は、日中は携帯を学校で使用することは禁止されており、放課後に部活をやっている人は家で携帯を使って友だちとやりとりをする時間が少ない。学校では他に大勢の人がいるため、他の人には聞かれない話などは家に帰って携帯でやりとりをするしかなかった。限られた時間でそのような内緒の話をしなければならなかったため、LINE に「既読」機能には一層神経質になっていたのだろう。大学では、高校と比べると比較的時間に余裕があるため、友だちと会って会話する機会も多く、「既読」がついたかつかないかに対して気にすることが少なくなったのではないかと考えられる。高校生と大学生では環境の違いから、LINE の機能に対する感じ方が異なってくることが予想される。

最後に、LINE の機能の中で便利だと思うものは何かを尋ねた。

—LINE を使っていて一番便利だと思うことは何ですか？

「どんだけ人数が多くても、一気に会話ができることかな。メールって最大 4 人までしかメッセージ送れなかったじゃん。自分を含めて 5 人としかトークできなくて。高校の時、一番仲良かったメンバーが 7 人だったんだよ。その人たちとは高 1 の時から仲良かったから、メールで盛り上がってふざけた話とかしてても、一度 4 人にメール送って、また同じことを残りの 2 人に送らないといけなかったのね。だから、夜寝ちゃった人とかはけずって、起きてるメンバーでやりとりするみたいなの。でもそうすると、話の内容がわからない人が出てきて、よくわからなくなってた。だから、今ほんとに便利。しかもメールは返信する文章が個人でバラバラになってくると訳がわからなくなってくるし。今だと、内容が全部残るからそういうこともないからね。」

—グループラインの中では積極的に会話に参加していくほう？

「うん、がんがん言う。そこで遠慮するような仲の人とはグループは作らないと思う。全員で話せるメンバーでしかグループで話さない。」

—じゃあ、あんまり大人数ではグループは作らないの？

「うーん、一番多くて学科全体のラインかな。でもほぼ関係のない話だから全部スルーで、あとはバレー部、バイト先くらいかな。（人数が）多いのは。」

彼女もまた、他の人たちと同様にグループチャットを最も便利な機能として挙げている。メールでは一定の人数を超えると、それ以上の人たちとは連絡を取ることが困難であった。そのことを、交友関係が広い人ほど感じているようだった。一度に連絡をとれる人数が増えたということによって、その点においては人間関係の選択化を促進したと言えるだろう。連絡をとれる人が増えれば、連絡を取ろうとする相手を選択する可能性を広げる。しかし彼女の場合は、全員で話ができる人としてしかグループを作らないと話しているため、グループを作る段階で相手を選択している。その意味では、グループチャットは人間関係を拡大する効果よりも、決まった相手との関係を濃密にする効果があると考えられる。

以上6人の大学生に対して行ったインタビューを分析してきた。対象者の属性によってLINEの使い方が異なっていたが、部分的には属性を超えて共通する実感なども得られた。次節では、本節の分析結果を、主に共通して述べられた点を取り上げまとめている。

第4節 インタビュー分析のまとめ

本節では、前節で行った大学生に対するインタビューの分析結果をまとめている。インタビューから得られた内容は、対象者の性格や所属している部活やその中での役職などによって、異なっている部分が多かった。しかしその中でも、多くの人に共通する内容が見つかった。それらをカテゴリー化し、若者のLINE利用の特徴としてまとめている。

4-1 便利だと感じる機能

まず、LINEを使っていて便利だと感じる機能に共通するものが見られた。

一つは、グループチャットである。メールの場合、4人または5人にしか一度にメッセージを送ることができず、それ以上の人数とやりとりをする場合には何回も同じテキストを作らなくてはならない。グループチャットでは、たとえやりとりする人が何人いたとしても、全員が同じ画面を見て会話の内容を共有することができる。今回のインタビューでは、部活の部長や学科の幹事など人をまとめることが多い人ほど、特に便利だと感じていた。一度に多くの人に連絡事項を伝えることができる点に便利さを感じていた。

もう一つは、テンポの速いやりとりができることである。メールの場合、文章を打ち

込み、送信し、相手が受信し、その返信をするという一連の作業に時間を要するが、LINE ではこれらのやりとりをほぼリアルタイムで行うことができる。何か予定を決めるときには、メールの時よりも早く返事が送られてくるので、スムーズに予定を立てることができ、前日からでも予定を決めることが容易になった。LINE で他愛もない話を楽しむことがある人もいたが、そのような人たちも、直接会って会話しているのに近い感覚でやりとりを行うことができるので、とても会話が盛り上がり話していた。

この二つの機能は、メールの機能の範囲ではできなかったことを、それらの機能の限界を超えて可能にしたものである。メールを使っていた時に不便だと感じていたことを改善しそれを可能にしたことが、若者たちを LINE に飛びつかせた要因になったと考えられる。

4-2 「既読」機能に対する感じ方

続いて共通していた項目は、LINE の「既読」の機能に対する感じ方である。多くの人に共通していたのは、自分が送ったメッセージに対して「既読」がつくことに関しては、とても便利だと感じていた点である。たとえ、「既読」ついてからしばらく返信が来なかったとしても、自分のメッセージを読んでいることさえ分かっていたらそれで十分であると話す人が多かった。読んでいけばそれだけでメッセージに対して了承していると考えよう。それよりもむしろ、自分が相手のメッセージに対して「既読」をつけることに関して気にすることが多いと話していた。中には、相手から「なんで既読無視したの?」と言われた人もおり、相手に「自分が既読無視されている」と感じさせてしまう可能性を心配していた。しかし、基本的には「既読」機能を不便だと感じている人は少なかった。

4-3 スタンプの使い方

最後に、LINE 特有のスタンプの使い方も共通していた。スタンプは、それまでの絵文字や顔文字の延長で、文字におけるコミュニケーションにおいて自分の感情を相手に伝えるためのものだと考えていたが、実際にスタンプを感情を伝える手段として使っている人は少なかった。そのスタンプに何か意味を持たせるのではなく、スタンプを文章とともに送ること自体が、若者のコミュニケーションにおいて重要な意味を持っているのだと考えられる。しかし、逆に相手からスタンプや顔文字が何もない返信が来たら、少し不安になる人が何人かいた。もともとスタンプなどを多用する人か、そもそもあまり使わない人かによって状況は変わってくるが、スタンプが相手に感情を伝える効果を持っていることは間違いないようである。

以上の3点が、対象者の属性に関わらず、ほとんどの対象者に共通して得られた内容である。次節では、本節で述べた機能も含めて LINE の利用が人間関係にどのような影

響を与えているのかを考察する。

第5節 LINEの利用が人間関係に与えた影響

本節では、LINEの利用が若者の人間関係にどのような影響を与えているのかを見ていく。第3章では、携帯電話の普及は人間関係の<濃密化>を促進し、人間関係を<選択化>する可能性を持ち、人間関係をある程度維持することに貢献していると述べた。本節では、これらの人間関係の<濃密化>、<選択化>、<維持>の影響をLINEの利用はどのように変化させたのか、そして携帯メールの普及によって生じるようになった人間関係の問題点とLINE利用の関連を考察しながらまとめていく。

5-1 <濃密化>への影響

まずは、人間関係の<濃密化>にLINEがどのような影響を与えているのかを考察していく。結論から述べると、LINEの利用は人間関係の濃密化を促進していると考えられる。LINEでは、ほぼリアルタイムでテンポの速いやりとりをすることができる。メールのようにメッセージを送信するまでの手間が少なくなった分、相手とより長い時間、より多くの話をするができる。実際に、メールよりもラインのやりとりのほうが話が盛り上がり、話す人も何人かいた。やりとりの内容は、中身の少ないような他愛もない話よりも、何か予定を立てるなどの事務的な連絡が多かったが、だからといってインタビューで話を聞く限りは、友人と直接会う機会が減ったわけではない。むしろ、予定を立てやすくなったために、友人と会う機会が増えている様子が、インタビューからうかがえた。友人と会う機会が増え、それ以外の時間もラインの中でつながっていられたようになったことで、友人関係が深くなったと考えられる。

また、グループチャットの機能も人間関係の濃密化に貢献していると考えられる。この機能によって、より自由に好きな選りグループを作ることができるようになった。実際に、同じ部活の中にも趣味や話の内容によって、メンバーが異なるグループが複数存在していた。気の合う人、話が合う人、ノリが合う人同士でグループを作り、グループに参加している人全員が会話を楽しむことができるようになっていた。携帯メールが人間関係の拡大よりも、身近な人間関係を強化したように、このグループチャットの機能はもともとあった関係を深くすることにこうけんしている。そして、携帯メールは個人対個人の間を強くしたが、LINEは複数人対複数人の関係を強くしたのがと考えられる。

5-2 <選択化>への影響

次に、人間関係の<選択化>に対する影響を考察していく。第3章で述べたように、人間関係が選択化する前提としては、相手と連絡を取ることができる可能性が高いことが挙げられる。携帯メールの場合、通話よりも相手の状況を考えずに気軽に連絡を取ることができるため、人間関係の選択化に貢献したと言えた。LINEは、メールよりもメッセージを送信するための手間を少なくしたことで、メール以上に気軽に相手に連絡をすることができるようになった。その点に関しては、人間関係の選択化を促したと言えるだろう。しかもその選択化は、携帯メールが促進したような機能的な使い分けではなく、場面や状況に応じて自分を変化させる状況志向的な使い分けであると考えられる。なぜなら、インタビューで話を聞くと、多くの人が趣味や話の内容などの様々な基準でグループを作る相手を選んでいたのである。つまり、グループによって、話に参加する積極性や話文句などを変えていると考えられる。人にはそれぞれキャラクターというものがあり、それはお互いの関係性にとって変わってることがある。あるグループの中では物事を率先して決めたりするような積極性を見せ、あるグループでは周りからいじられる対象になることがある。メール以上に、より相手と対話しているような感覚で常にやりとりすることが可能になったことで、メールの時のような強固な自己を維持しながら連絡を取ることが難しくなったと考えられる。

しかし、LINEでは「既読」の機能によって、相手の状況がわかりやすくなった面がある。相手の状況がメールよりもわかりやすくなったということは、相手に連絡をすることを一度考えてしまうことも考えられる。「既読」がついたのに長時間返信が来なかった場合、「今は忙しいのかな」と考え、それ以上の連絡を遠慮する。また、インタビューからは、「既読」がしばらくつかないことに対しても不安を覚えるという話が聞けた。これらの対象者の感想をもとに考えると、メールよりもLINEのメッセージが来た時に、なるべく早く返信しないといけないという心理が働くことが予想される。その意味では、メールよりもLINEは、通話のような相手に返信を強要する暴力性を少なからず持っていると考えられる。しかもこの暴力性は、グループの中よりも個人ラインにおいて高くなる。グループの場合、自分が送ったメッセージに対して反応する可能性がある人が複数いるのに対し、個人ラインでは一人の反応を待つことになるからである。相手も、反応できるのが自分一人であると考えの方が、早く返事をしなければと焦ってしまうのである。

手間が少なくなったという作業的な面に関しては、メールよりも気軽さが増しているが、心理的な面では一部メッセージを送信することに対して躊躇する可能性が見られた。そのため、LINEによる人間関係の選択化は部分的なものであると考えられる。

5-3 <維持>への影響

続いて、人間関係の<維持>への影響を考察する。第3章で述べたように、人間関係

の維持には二つの程度がある。一つは、限りなくゼロに近いがギリギリのところをつなぎとめているような維持の仕方、もう一つは徐々に関係が深まっていくような維持の仕方である。携帯メールが貢献した人間関係の維持は、この二つの程度のうちどちらかに絞ることは難しかった。LINE に関しても同様に、この二つの程度の維持の仕方に貢献している側面が見られた。

メールの場合、他愛もない話を家に帰ってもするというように、途切れなく連絡することで、人間関係が徐々に深まりながら維持されていく。この影響を LINE はさらに加速させたと考えられる。インタビューの中にも、ふざけた話などが盛り上がりやすいのはメールよりも LINE であるという話があった。家に帰ってもリアルタイムでのやりとりが可能のため、直接会って話していたことの続きを帰宅した後も話すことができる。そのためメールよりも、途切れず継続したやりとりをすることができるようになった点が、関係が深まっていく維持に貢献していると考えられる。

もう一方の限りなくゼロに近いが、ゼロにならない維持の仕方に貢献しているのは、会話の内容がすべて保存される機能である。例えば、しばらく連絡を取っていなかった人と久しぶりに連絡を取る場合、前のトーク履歴を見ることで、以前どんな話をしたのかを確認することができる。しばらく連絡を取っていなかった相手だとしても、全くのゼロからやりとりを始めなくても済む。つまりメール以上に、関係をゼロにすることがなくなったのだと考えられるのである。

また、インタビューの対象者の一人である KK さんは、グループで久しぶりにやりとりをした相手と、その後も個人ラインでやりとりを続けた経験があると話していた。久しぶりの相手だとしても、そこから徐々に関係を深めていくこともできるのである。このように、LINE は二つの程度の関係の維持の仕方に貢献しているのである。

5-4 携帯メールがもたらした問題点との関連

最後に、携帯メールが普及したことによって生じた、人間関係における問題点と若者の LINE 利用との関連を考察する。携帯メールは、絵文字や顔文字の使用によるメッセージの「誤読」と、メッセージに対してなるべく早く返信しないとイケないという「返信の強要」の二つの要因によって、人間関係に不安を与えていると第3章で考察した。

まず「誤読」に関してだが、携帯メールにおける絵文字や顔文字に代わるものとして、LINE にはスタンプがある。私はこのスタンプの利用に関して、「ある状況ではスタンプを使うべきだ」という「メール作法」ならぬ「LINE 作法」というものが、現在の若者の間にはあるのではないかと考えている。「ある状況」とは、相手との関係性によって異なってくるが、例えば、会話が終わるときには必ずお互いがスタンプを押してその日のやりとりは終了する場合や、感謝を伝えるときには必ず文章に加えてスタンプを押す場合などがある。これらの状況は、別にお互いに話し合っただけではなく、互いにやりとりをして暗黙のうちに作られていく。そのような状況の前提となっているの

は個人レベルで「あの人はこういう時にいつもスタンプを使う」または「あの人は普段からあまりスタンプを使わない人だ」と周りから思われていることである。やりとりする相手がどのような使い方をするのかを知っていることで、自然と「この人とはこういう時にスタンプを使う」という一種の決まりのようなものが生まれるのである。そして、そのような決まりに反した時に、相手に不安を与えることになる。実際にインタビューの中で、いつもスタンプを使う人が、絵文字や顔文字も使わず短文でメッセージを送ってくると、少し「冷たく」感じ、「何かあったのかな」と不安になることがあるという話があった。その日の気分や自分が置かれている状況などによって、スタンプを使うか使わないかも含めて、メッセージの送り方には差が生まれる。しかし、一度決まりができてしまうと、その決まりに反した送り方をした場合、相手に少なからず不安を与えることになる。「自分はこういう時にスタンプを使う」というような決まりを自分で意識していなければ、意図していなかった感情を相手に与えてしまう可能性があるのである。インタビューの話の事例のように、スタンプの機能によってメッセージを誤って解釈してしまう可能性が増えたと考えれば、LINEの利用が「誤読」の影響を拡大したと推察される。

もう一つの要因である「返信の強要」に関しては前述したように、「既読」機能によってその影響が強くなったと考えられる。「既読」機能によって相手に自分の状況がわかりやすくなったため、相手に不信感を与えないようになるべく早く返信しようとする心理が働くと考えられるからである。LINEはメール以上にリアルタイムでのやりとりを可能にしたことで、「返信の強要」をより一層強めたと言えるだろう。次の日の予定を立てている際、話し合いが盛り上がっているときに、少しでも返信するのに時間がかかってしまうと、話し合いの流れを乱してしまうことになる。直接会って予定を話し合っている最中に、別の用事を思い出し、少しの間その場を離れるような感覚である。このように、対話に近い感覚でやりとりができるようになったことで、その感覚に準じてテンポの速いやりとりが求められるようになったのである。

この二つの要因以外に、人間関係に対するストレスを生む新たな要因として、LINEにおいては一度参加したグループから抜け出しにくいということがある。これは、今回のインタビューの対象者であるSさんの話から、推察されることである。若者がLINEで作るグループは、好きな人と気軽にやりとりができるようなものばかりではなく、「参加しなければならない」グループというものも存在する。特に大学生の場合は、学生同士で事務的な連絡を共有しなければならない場面が多いため、そのような大事な連絡を聞くためにも「参加しなければならない」グループが必ずある。それ以外にも、友人との関係を維持するためにも参加しておかなければならないグループというものもあるかもしれない。そのような、必要最低限のやりとりしか求めないグループの中で、自分と関係ない話をされたら、Sさんのようにうるさいと思うだろう。実際に、そのようなグループのメッセージは通知されないように設定していると話していた。このように、

そのグループに対する意識が人によって異なってしまうと、そこでのやりとりはストレスにしかなくなる。グループチャットはとても便利だと感じている人が多かったが、グループに参加している人との関係や意識の違いによって、人間関係に対してストレスを抱かせる機能になってしまう可能性もあるのである。

以上、携帯電話がもたらした人間関係の〈濃密化〉、〈選択化〉、〈維持〉、そして問題点に、LINE の利用がどのような影響を与えたのかを考察してきた。どの項目に関しても、LINE の機能はその影響を部分的に加速させたと言える。それは、LINE の機能の多くは、メールの機能を拡張させたものが多いからであると考えられる。

第6節 「やさしさ」とLINE 利用の関係

本章の最後に、若者にとっての「やさしさ」の意味とLINE の利用がどのように関連しているのかを考察していく。1960、70年代にはそもそも「やさしさ」の意味が重視されてなかったのに対し、1980年代に入ってから、人と接するときには相手にとっての「やさしさ」とは何かを考えるようになった。このような変化に携帯電話の普及は大きくかわり加速させた。それは、「やさしさ」の変容を客観的に見たときに、指標となるものの一つに「場の共有」というものがあるからだ。「やさしさ」の意味が重要視されていなかった時代は、人との関係において、何か一つのことと一緒にやることが重要とされていた。例えば、道端でコンタクトレンズを落とした人を見かけたとする。その場合、以前は迷わず一緒にコンタクトレンズを探して、その困っている人を助けようとしたはずだ。しかし、「やさしさ」の意味を考えるようになってからは、コンタクトレンズと一緒に探すことで落とした人はどう思うかを一度考えるようになった。そして、「相手が、『探すのに手伝わせて申し訳ない』と思うかもしれない」、「相手は『一人で探しているほうが周りから目立たなくてやりやすい』と思っているかもしれない」などという考えに至り、結果的に何もせずに通り過ぎることを選択するようになった。このように、「やさしさ」の意味が重要とされるようになったことで、何かと一緒にやる場を共有することが減ったのである。携帯メールによるコミュニケーションは、この「場の共有」の減少に影響を与えたと考えられる。携帯を利用することで、相手に直接会わなくても、メールを使って連絡してしまえばそれで用が済んでしまうことが多くなった。そのため、相手と会って一緒に何かしようとする、「場を共有する」意識が若者の中に少なくなったのではないかと考えられる。携帯メールでのコミュニケーションは、会話のような声によるコミュニケーションと比べてやりとりに時間がかかるため、話していることをすぐに行動に移すような即時性が弱いことが、「場の共有」の機会を減らした

要因であると考えられる。以上のことから、携帯メールは「やさしさ」の変容に大きくかかわり、その影響を加速させたと言えるのである。

では LINE の利用は「やさしさ」の変容にどのようにかかわっているのだろうか。今回行ったインタビューで話を聞いていると、LINE を使ってやりとりをしている時に、相手に気を遣っていることがうかがえる場面が多くあった。スタンプから相手の感情を悟ったり、「既読」がつかない相手のことを心配したりしていた。相手のことを気遣って考えていることから、現在の若者の LINE のコミュニケーションでも、「やさしさ」の意味が重要とされているようだ。LINE の機能によって、相手の状況がよりわかりやすくなった状態でやりとりができるようになった。相手の状況を知り、それを考慮したうえで、言葉や態度を選びやりとりをしながら関係を築くことが可能になった。

しかし携帯メールが与えた影響のように、相手のことを考えたやりとりをしやすくしたことで、「場の共有」を減少させたわけでない。私は、LINE 上でやりとりをすること自体が、場を共有していることだと考える。なぜなら、リアルタイムで会話と同じような感覚でやりとりできることに加えて、お互いが同じ画面を見ながら話題を共有することができるからである。LINE 上の画面が一つの「場」であり、その中で予定を立てたり他愛もない話をするのが「場の共有」であると考えられる。しかも、そこで決めた予定などはすぐに行動に移しやすい。グループチャットを使えばより多くの人と予定を共有できるし、実際にインタビューでは、次の日の予定を前日の夜に決めることがよくあるという話もあった。つまり LINE は、「場の共有」の機会を保ちつつ、携帯メールが加速させた「やさしさ」の変容を促進させるという、若者の人間関係に新たな影響を与えたメディアであると言えるのである。

以上、本節では大学生に対するインタビューをもとに、若者の人間関係に対する LINE の影響を考察してきた。LINE は、それまで若者のコミュニケーションにおいて主流だった携帯メールの機能を拡張させている。そのため、携帯メールが人間関係に与えた影響を、LINE は部分的に加速させたと考えられる。従来から論じられてきた人間関係に対する影響以外にも、LINE 独自の機能によって新たな影響や問題点が生じる可能性も考えられた。また、若者の人間関係を論じる際に重要な視点である「やさしさ」の意味の変容に関して見ると、LINE はそれまでのメディアとは異なる新たなコミュニケーションツールの側面を持っていることがわかった。

LINE は現在でも利用者を拡大し続けている。この調子で今後 LINE の利用が広がり続ければ、また新たな人間関係が形成されていくのではないかと考えられる。

終わりに

本研究は、「携帯電話の、普及は本当に人間関係を希薄化させたのか」という私のかねてからの疑問から始まった。私が疑問を抱く以前から、人間関係が希薄化したという論は展開されていた。その論によると、人間関係の希薄化の大きな要因は、若者の考える「やさしさ」の意味が変化してきたことであり、それに携帯電話の普及が関係しているということだった。しかし最近の研究では、携帯電話の普及によって若者の人間関係は希薄化ではなく、むしろ濃密化しているとされている。それは携帯電話の利用によって、交友関係が広がるにつれて、相手によって接し方を変えるのは「浅い」関係を築いているのではなく、状況に合わせて適切な言葉や態度を選ぶような選択的な志向による関係づくりであると考えられているからである。直接対面せず、相手とのやりとりを可能にする携帯メールはこの関係づくりに貢献している。このような人間関係の質の変化には、「やさしさ」の意味を考えることより直接的な行動が重要とされていた時代から、行動に移す前に相手のことを考えるような時代への変化が大きくかかわっていると考えられる。そして、携帯電話が人間関係に与えた影響を、LINE は部分的に加速させた。それには、携帯電話の機能を拡張させたような LINE の様々な機能が大きく貢献していることが、大学生に対するインタビューから明らかになった。それだけではなく LINE は、「やさしさ」の変容を捉えるときの一つの指標であった「場の共有」の機会を保ちながら、「やさしさ」の変容に大きな影響を与えたという、今までにない新たなメディアの側面も見られた。

現在でも LINE の利用者は増加し続けている。このままの勢いで増加し続ければ、年齢の低い層の利用者が拡大していくことが予想される。ほとんどの小・中学生及び高校生は、学校にいる間は携帯電話の使用が禁止されているため、LINE の利用は主に放課後家に帰ってからになる。学校が終わっても携帯を開けば、またすぐに友だちとのやりとりが始まり、一日の大半を友だちとのコミュニケーションに費やす。LINE でのやりとりが増えるからといって、先述したように友だちと直接会う機会が減るとは限らない。予定を立てやすくなったということを考えると、友だちと会う機会はむしろ増えているかもしれない。いずれにしても、LINE の利用によって、子どもたちの人間関係が深まっていく可能性があることは間違いない。

しかし LINE の利用によって、新たな人間関係の問題が生じることもある。インタビューの対象者の中に、塾でバイトをしていて生徒と話す機会が多い人から聞いた話によると、グループチャットの中に仲間外れにされている人がいて、その人はそのグループから抜けて学校で非難されるのが嫌で、そのグループから抜けるに抜けられない状態であるという。また最近のニュースでは、教師と生徒が LINE を使ってやりとりをして、親密な関係を築いたことが問題となった。このような LINE の不適切な使い方が、学校現場でも問題となっている。この現状を受けて、私は教育現場における情報教育の中で

も携帯教育の充実が図られるべきだと考えている。現在では情報教育の分野において、携帯電話に関する内容の比重が少ない。あるとしても、インターネットの正しい利用の仕方に関するものばかりである。それに加えて、携帯電話を使っての正しい人間関係の築き方に関する教育がもっと盛り込まれるべきだと考える。

今後は、小・中学生及び高校生がどのように LINE を使って人間関係を築いているのかを調査したうえで、それをもとに、現在どのような携帯教育が行われているのか、今後どのように携帯教育が行われていくべきなのかを研究していきたいと考えている。

参考文献

- 浅野智彦, 1999, 「親密性の新しい形へ」 富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣
- 石井健一, 2014, 「モバイルは他のメディアとどう違うのか」 松田美佐・土橋臣吾・辻泉編『ケータイの 2000 年代 成熟するモバイル社会』東京大学出版会 43-64
- 岩田孝, 2014, 「ケータイは友人関係を変えたのか」 松田美佐・土橋臣吾・辻泉編『ケータイの 2000 年代 成熟するモバイル社会』東京大学出版会 171-200
- 大平健, 1995, 『やさしさの精神病理』岩波書店
- 岡田努, 2010, 「人間関係は希薄になったか」 松井豊編『対人関係と恋愛・友情の心理学』朝倉書店, 90-101,
- 岡田朋之・松田美佐編, 2012, 『ケータイ社会論』有斐閣選書
- 岡田朋之・松田美佐編, 2008, 『ケータイ学入門』有斐閣選書
- 栗原彬, 1996, 『やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェイス』新曜社
- コグレマサト・まつもとあつし, 2012, 『LINE—なぜ若者たちは無料通話&メールに飛びついたのか?』マイナビ新書
- 小原一馬, 2004, 「大学生における携帯電話の普及による友人関係の変化」 『教育・社会・文化：研究紀要』10, 1-17
- 小林哲生・天野成昭・正高信男, 2007, 『モバイル社会の現状と行方—利用実態にもとづく光と影』NTT 出版
- 佐山薫子, 1985, 「友だちづきあい」 東京都生活文化局『大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係の希薄化との関連から見た分析 東京都青少年問題調査報告書』45-58
- 千石保, 1985, 『現代若者論—ポストモラトリアムへの摸索』弘文堂
- 千石保, 1991, 『「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち』サイマル出版会
- 辻泉, 2014, 「ソーシャル・メディアと若者」 松田美佐・土橋臣吾・辻泉編『ケータイの 2000 年代 成熟するモバイル社会』東京大学出版会 201-206
- 辻大介, 1999, 「若者の人間関係は『希薄化』したのか」 『東京大学新聞』2172, 2面
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
- 中西新太郎, 2008, 『若者たちに何が起きているのか』花伝社
- 新美明夫, 2009, 「『若年層の友人関係における携帯電話利用』研究 —その概観と大学生の経年的調査による検討—」 コミュニケーション学部・心理学研究科編『愛知淑徳大学論集』9, 89-102

- 橋本良明, 1998, 「パーソナル・メディアとコミュニケーション行動」 竹内郁郎・橋元良明・児島和人編『メディア・コミュニケーション論』北樹出版
- 羽瀨一代, 2008, 「ケータイに映る『わたし』」 岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』有斐閣選書
- 藤本一男, 2006, 「携帯電話コミュニケーションを考えるための考察—非連続的空間の拡大と可視化される人間関係—」 『作新学院大学人間文化学部紀要』4, 1-14
- 正高信男, 2003, 『ケータイを持ったサル—「人間らしさ」の崩壊』中公新書
- 松下慶太, 2012, 「若者とケータイ・メール文化」 岡田朋之・松田美佐編『ケータイ社会論』有斐閣 61-76
- 松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用 - 関係希薄化論から選択的關係論へ」 『社会情報学研究』4, 111-122
- 松田美佐, 2006, 「序文 ケータイをめぐる言説」 松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子編『ケータイのある風景—テクノロジーの日常化を考える』北大路書房 1-24
- 松田美佐, 2014, 「ケータイの 2000 年代」 松田美佐・土橋臣吾・辻泉編『ケータイの 2000 年代 成熟するモバイル社会』東京大学出版会 1-19
- モバイル社会研究所, 2010, 「2010 年一般向けモバイル動向調査」 (<http://www.moba-ken.jp/whitepaper/mct/mct-02.html>)
- Benesse 教育研究開発センター, 2010, 「第 2 回子ども生活実態基本調査報告書」 (http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/index.html)
- C.H.クーリー, 1970, 『社会組織論』(大橋幸ほか訳) 青木書店
- E.ゴッフマン, 1974, 『行為と演技』(石黒毅訳) 誠信書房
- Milgram, S., 1970, *The Experience of Living in Cities*, Science, 167 (3924)
- NHK 放送文化研究所編, 2013, 『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012—失われた 20 年が生んだ“幸せ”な十代』NHK 出版